

第2節 支群B

(1) 支群Bの概要 (第29・30図)

支群Bは、古墳群のほぼ中央に位置する。略東西方向に伸びる微高地の東端の位置にある。西側に谷を挟んで支群Cが、南側には支群Fと支群Hがある。

現在までに確認された古墳は、24～27・44・45号墳の6基の円墳である。1964（昭和39）年の段階では24～27号墳の4基が知られていたが、2023（令和5）年の調査で新たに44・45号墳の2基の古墳が確認された。1970（昭和45）年に支群の東側にあたる箇所が削平を受け、27号墳が緊急調査された後、26・27号墳はともに削平された。現在確認される古墳は、支群西側の24号墳と25号墳のみである。支群Bの北側は標高245～246mの平坦面を形成し、支群Bの丘陵は比高3mの標高249mにある。27号墳の北側は、傾斜が緩やかで北側に張り出す形状となっている。また、東端は土手状の高まりが見られる。こうしたことから、27号墳が削平される際、その土砂は重機で北側に押されていたと想定される。

24号墳は、支群の最西端に位置する古墳で、その規模は直径15mである。25号墳は、24号墳の東側に位置する。墳丘の規模は20mで、高さは2mである。26号墳は南西側に位置する。27号墳は、25号墳の東に約30m離れて位置する。27号墳は支群の中でも最も規模が大きく、緩い丘陵の北側端部に位置する。1970（昭和45）年12月、重機による掘削を受けた際に石棺が発見され、その報を受けた郡山市の関係者により緊急の調査が行われた。関係者が現地に到着した際、既に南側の石棺は蓋石が除かれ、石棺内部の遺物と底に敷き詰められていた礫が取り上げられていたという。

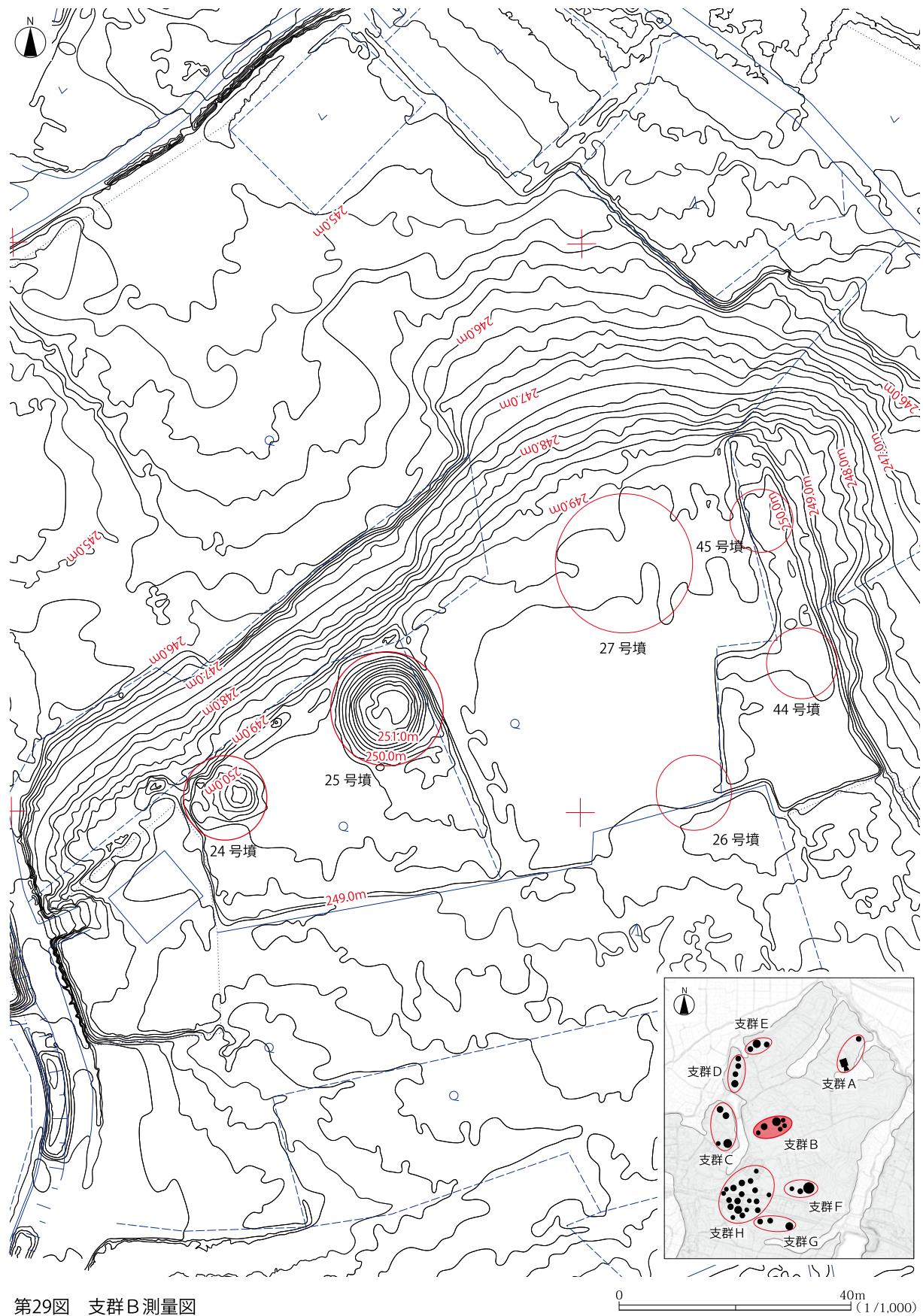
44・45号墳は丘陵の東端に位置する。この場所は、土手状の高まりが南北方向に伸びており、明確な墳丘の高まりは見られなかったが、トレンチ調査により周溝が確認されるにおよび、古墳の存在が明らかとなつた。周溝内側での規模は44号墳が直径12m、45号墳が直径11mである。

支群Bでの調査は、1970（昭和45）年の緊急発掘調査と2023（令和5）年の保存事業調査の2回実施されている。1970（昭和45）年の調査は、前述の通り石棺確認に起因するものであり、石棺の全容を確認するために古墳中央に設けられた第1トレンチと、墳丘の形態・規模を確認するために設定された第2～7トレンチの6か所のトレンチである。2023（令和5）年の調査は、削平された27号墳及び26号墳の正確な位置・規模を確認するためのものである。第8～12トレンチで27号墳の周溝を確認し、さらに第14トレンチで26号墳の周溝を検出した。また、第15・16トレンチで新たに確認された古墳を44号墳とし、第17・18トレンチで確認した古墳を45号墳とした。なお、第9トレンチでは45号墳の埋葬施設である箱式石棺の一部を確認するとともに、27号墳の南に設定した第13トレンチでは1号土坑を確認した。

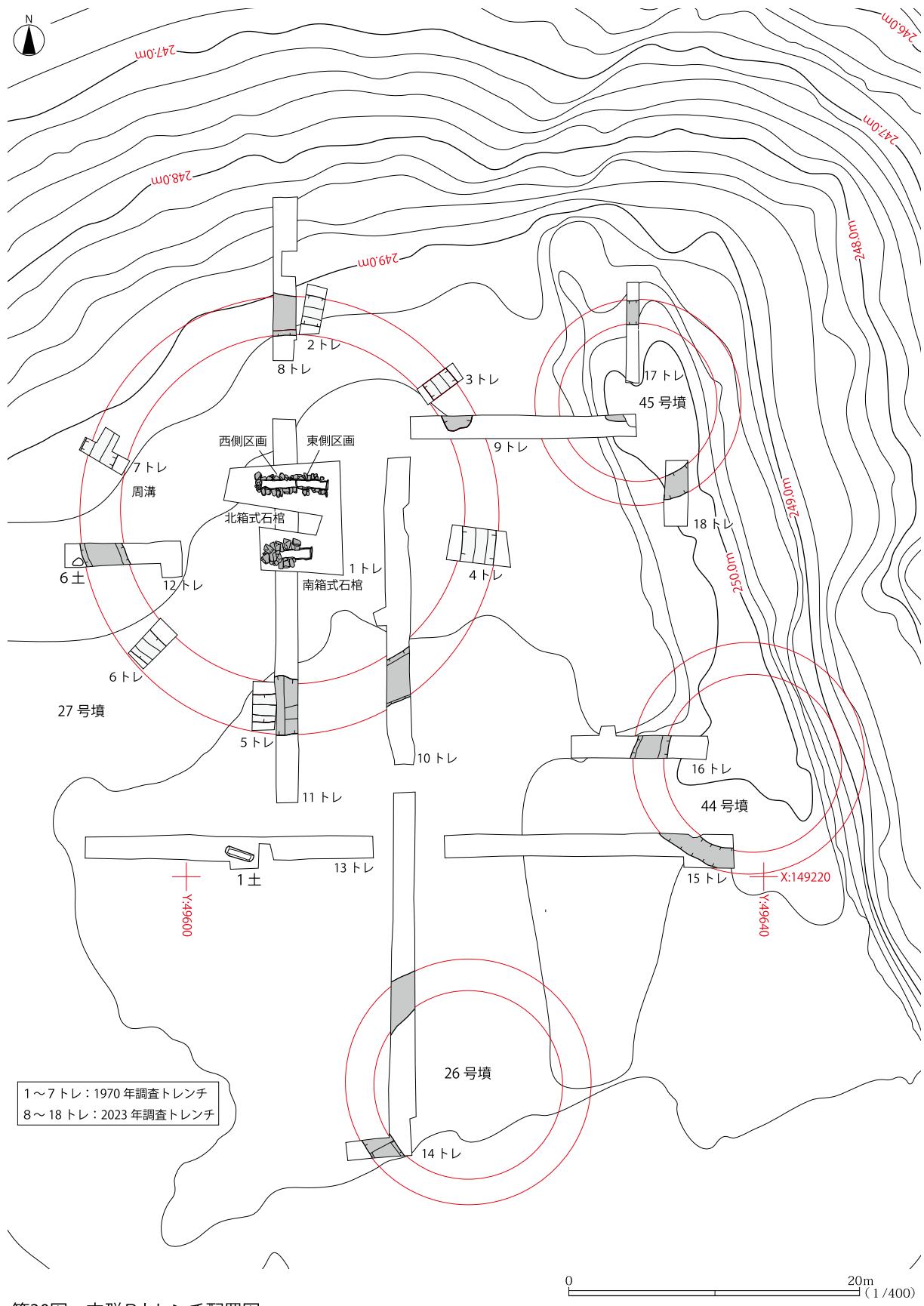
(2) 正直27号墳の概要

1. 墳丘 (第31図、図版8)

調査では埋葬施設と周溝が確認され、墳丘の中央部で箱式石棺が検出された。石棺は南北に並列しており、北箱式石棺と南箱式石棺とに分けられる。このうち北箱式石棺は中央に仕切り板が配され、東側区画と西側区画とに分けられている。周溝は10か所のトレンチで確認され、周溝内側で計測した規模は直径25mを数え



第29図 支群B測量図



第30図 支群Bトレンチ配置図

る。緊急の調査であったため、構築状況や墓坑などの状況は確認できておらず、墳丘の構築方法などについては不明である。

墳丘の中央部では標高 251.5mを測る。表土下は黄色土を基調とする盛土で、表土下 180 cmから下は褐色土である。

2. 周溝（第31図）

1970（昭和45）年の調査では、周溝を確認後、断面の状況を確認するために第2～7の6本のトレントが設定され、掘り込み調査が行われた。2023（令和5）年の調査では、周溝に第8～12の5本のトレントを設定し、確認した周溝の掘り込みを行った。

両トレントの周溝確認部分を比較すると、隣り合うトレントですら周溝上端の幅が異なるものがある。その最たるもののが、墳丘南側にあたる第5トレントと第11トレントである。第5トレントでの周溝は幅 200 cmであるのに対し、第11トレントは幅 410 cmである。こうした状況が生じた背景には、堆積土の認識が関係していると思われる。第11トレントの最も外側の層はしまりのある黄褐色土で、第5トレントでは最も外側の層まで掘り下げていないことが考えられる。こうした状況は南西側の第6トレントや北側の第2トレントなどでも同じものと考えられる。1970（昭和45）年のトレント調査の際は、最も外側に堆積する黄褐色土を地山と認識していたために、掘り足りなかつた可能性が高いのである。そのため、これまで 27号墳は直径 26mとしてきたが、直径 25mと修正する。

3. 埋葬施設（第32図、図版8）

開墾を目的とした重機による掘削は、古墳の東側から行われた。その際に発見された石棺は、板石を組み合わせた箱式石棺と呼ばれるもので、南北に並列する形で検出されたため、それぞれ「南箱式石棺」と「北箱式石棺」と呼び分けられる。なお、北箱式石棺は中央を板石で仕切られた状態であった。そのため、仕切られた西側は「西側区画」、東側は「東側区画」と呼称する。1970（昭和45）年の調査で、埋葬施設は東西方向を主軸とした2基の箱式石棺が南北に並列することが判明している。

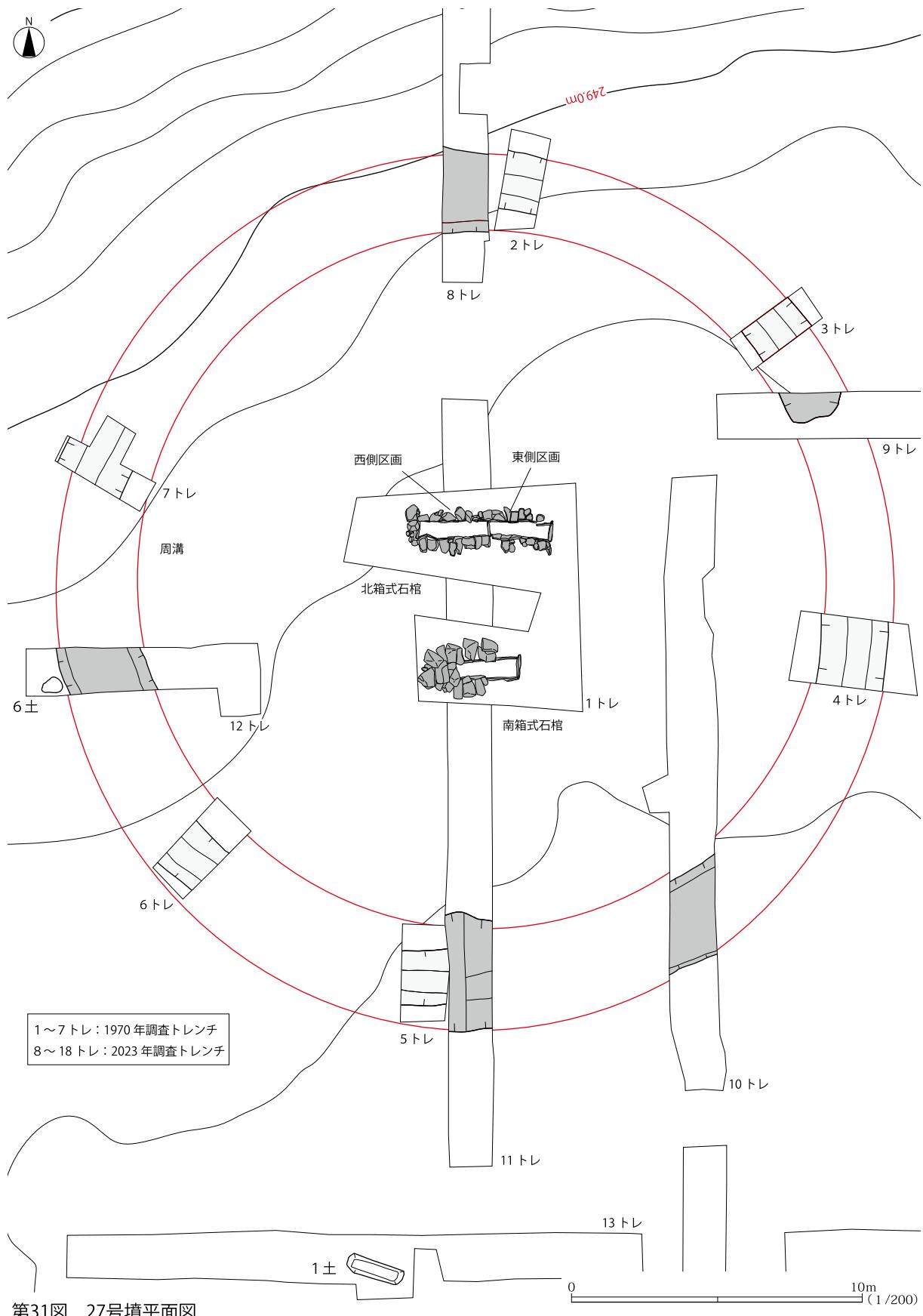
2023（令和5）年の調査では、南箱式石棺が想定できる場所において、凝灰岩の小片が地山にめり込んでいるのを確認した。また、北箱式石棺が想定される場所では、北側壁の下端部破片が地山にめり込み、その南側に若干の礫石の散乱が認められた。いずれも箱式石棺の残欠と判断できる。両箱式石棺を構成した石材は、現在、北東にやや離れた場所にて投棄・集積された状態で存在する。

（3）南箱式石棺と出土遺物

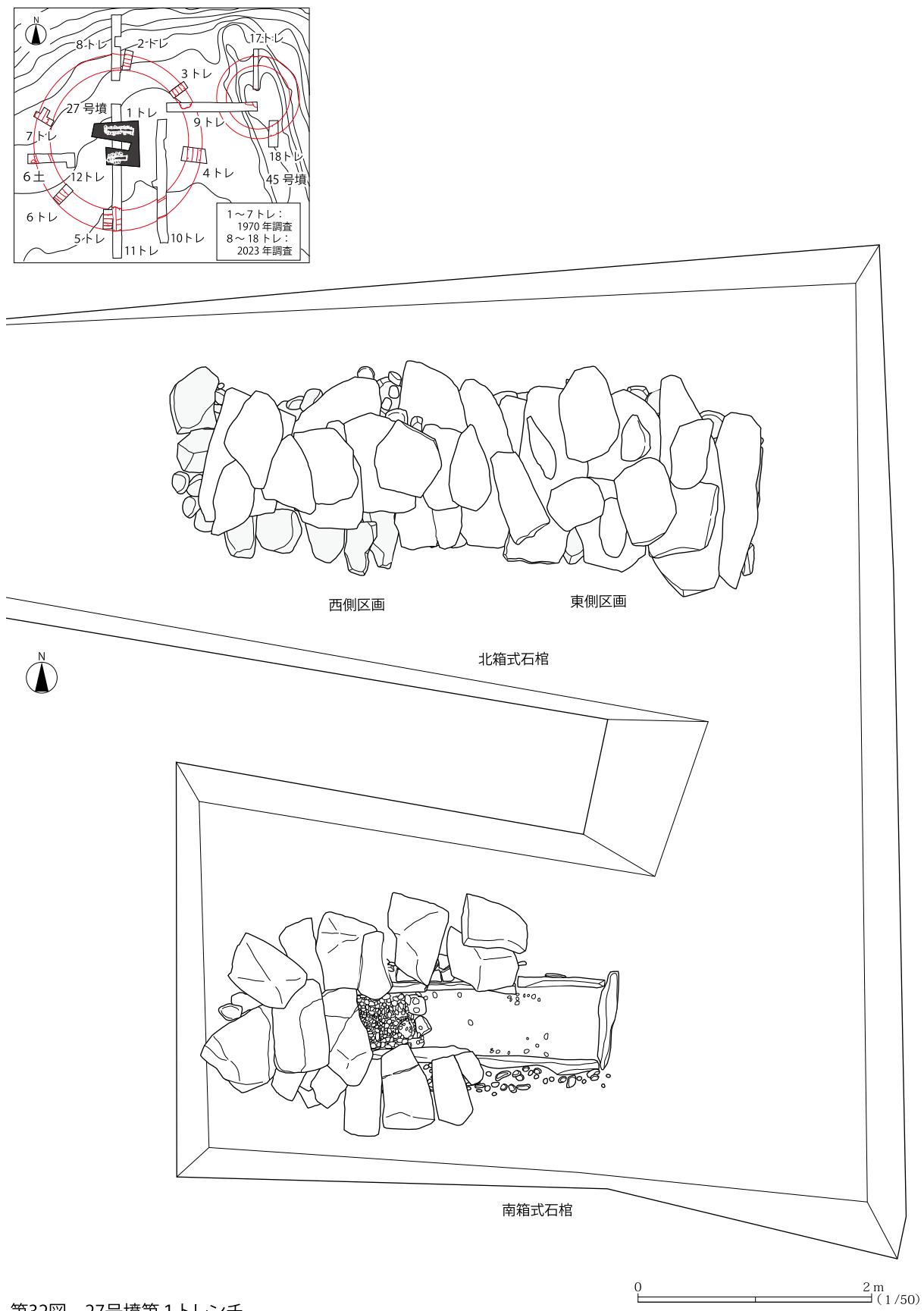
1. 南箱式石棺（第33・34図、図版9・10）

南箱式石棺は、重機の掘削により石棺が発見された際、棺底に敷き詰められた礫とともに多量の石製模造品が取り出された。そのため、石製模造品の出土状況は不明である。ただし西端については、かろうじて遺物が副葬された状態で残存していた。

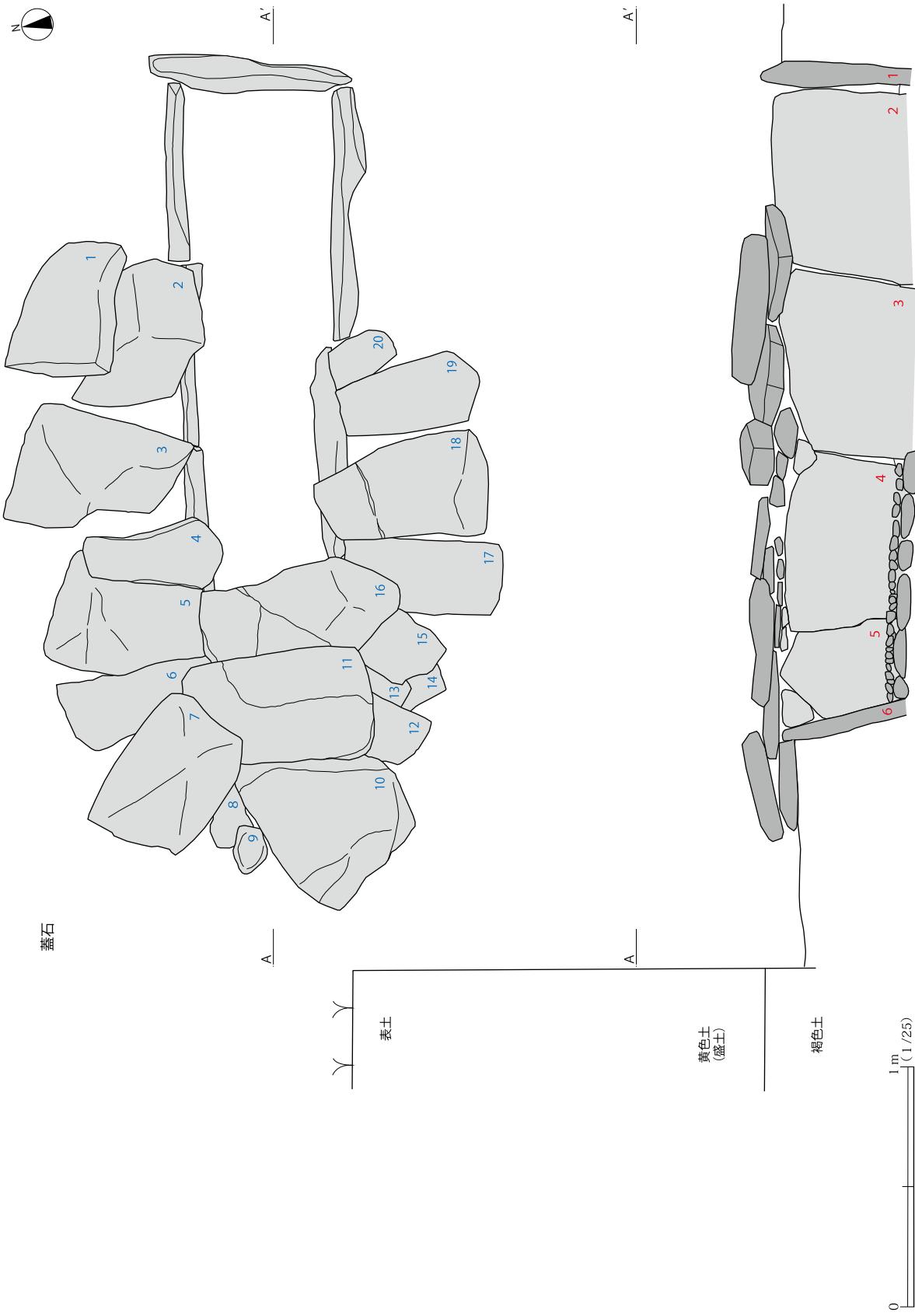
石棺は蓋石で覆われており、西側の蓋石がかろうじて残る（第33図）。石棺の南北両側壁上に石を据え、それらの石に掛かるように扁平な石をのせ蓋としている。北側側壁上には長軸 50～70 cmの凝灰岩（1～6）を、南側側壁上には、75×40 cmを最大とする石（18）が据えられる。蓋石は、西端付近で確認される 11 が 80×45 cmを測る。



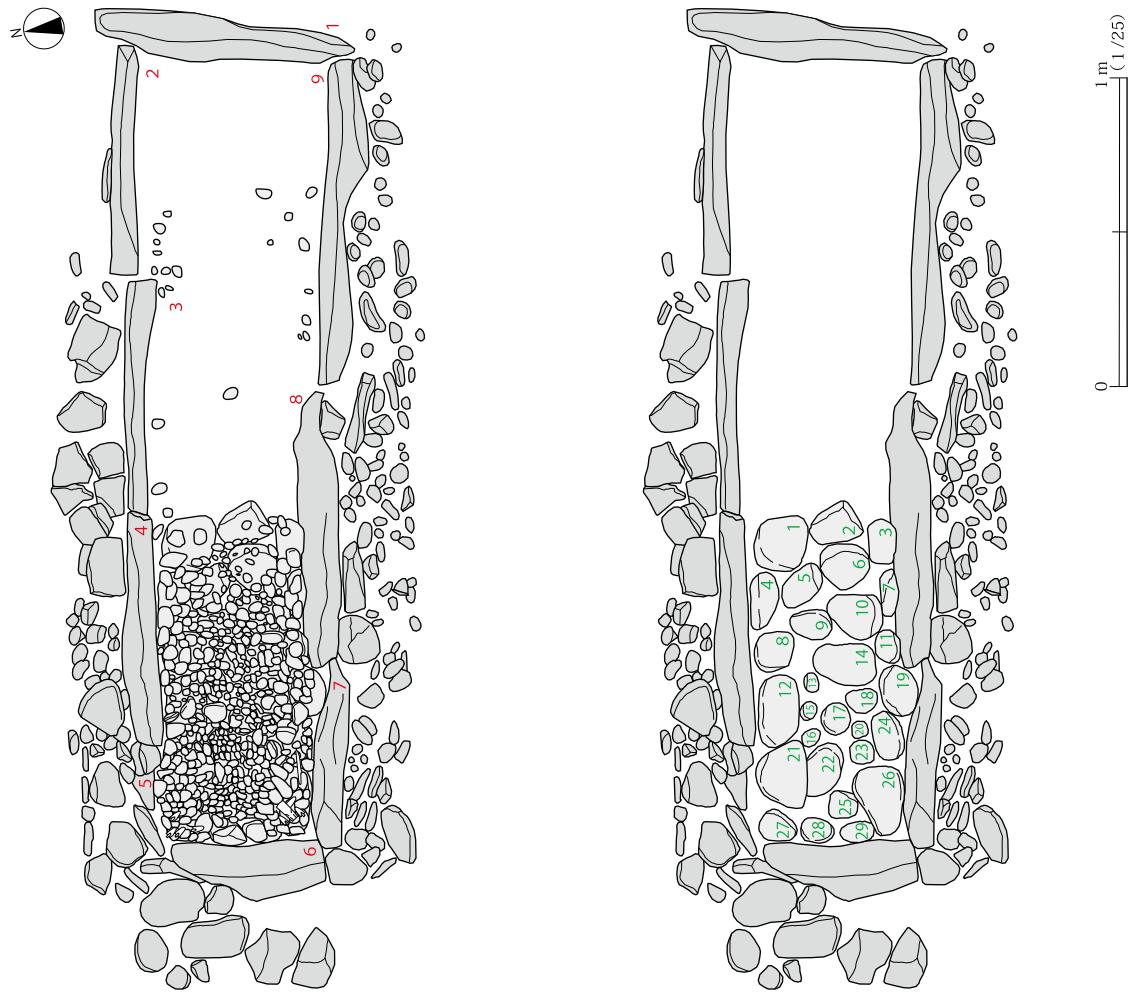
第31図 27号墳平面図



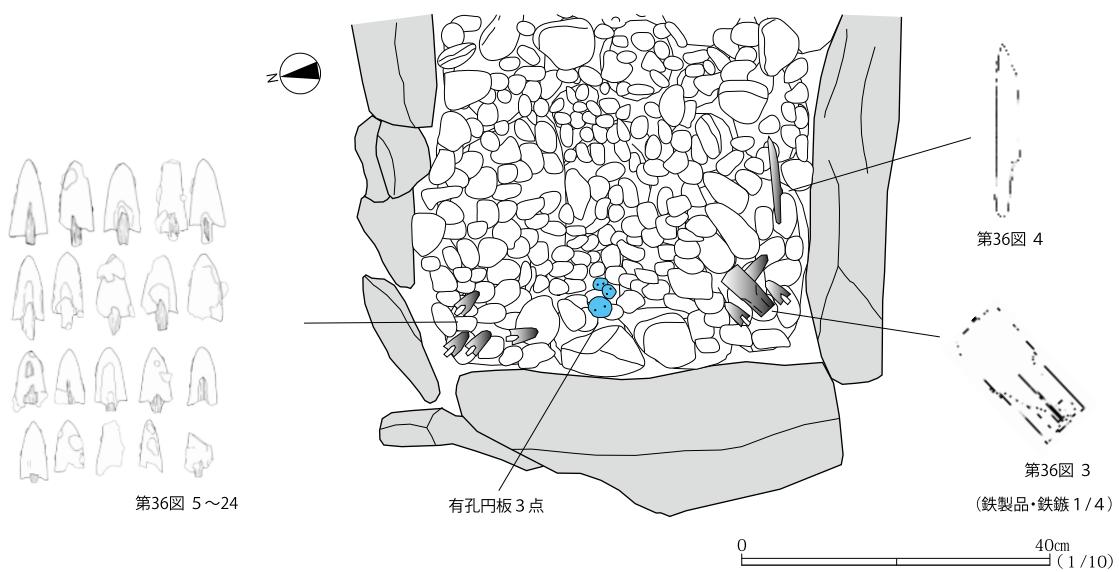
第32図 27号墳第1トレンチ



第33図 27号墳南箱式石棺蓋石平面図・側面図



第34図 27号墳南箱式石棺側石・底石平面図



第35図 27号墳南箱式石棺遺物出土位置図

石棺側壁を構成する石材は、東壁の1が87cm、西壁の6が49cmである（第34図）。北壁は東から74cm（2）・78cm（3）・77cm（4）・38cm（5）の4枚の板石からなる。南壁は東から108cm（9）・93cm（8）・60cm（7）の3枚の板石からなる。石棺自体の規模は、内側中央部で東西長辺259cm、南北短辺49cm、床面からの高さは55cmを測る。また、東側短辺で63cm、西側短辺で52cmを測り、若干東側の幅が広い。床面は最大8cm前後の礫が敷き詰められている。さらにその下には扁平な河原石が敷き詰められている。この河原石は最大30×20cmの扁平な石で、1～29が確認されている。

2. 遺物出土状態（第35図、図版9・10）

遺物出土状態は、西壁付近でかろうじて把握される。西壁の両端から鉄鏃が併せて20点出土した。その内訳は北西隅・南西隅でそれぞれ10点であり、いずれも先端を中央に向けるように置かれていた。また、南西隅では鉄鏃に混じり斧も刃先を中央に向けて出土している。なお、刀子はわずかに離れた位置で先端を東に向け南壁と並行に副葬されている。石製模造品の多くは東側から出土したが、有孔円板3点は西壁付近で検出した。その内訳は、刀子形6点・斧形1点・剣形19点・有孔円板24点である。

ところで、南箱式石棺では人骨が遺存していない。同石棺は発見当時、内部が土砂で埋もれた状態であった。遺体を埋葬した後、いずれかの時点で蓋石が崩落し、それとともに土砂が石棺内部に流入したと考えられ、人骨は土砂と接する状態であった。日本の土壤は酸性土のため、人骨は腐食した可能性が高い。

石棺は東側短辺が幅広な点、石製模造品は東側から多数出土していることなどから、頭位は東に向けられていたと考えるのが妥当である。

3. 鉄斧・鉄鏃（第36図、図版11）

1・2は、剣あるいは刀と思われる破片で、1は残存長9.0cm、2は残存長4.7cmである。いずれも目釘孔が見られる。

3は、有袋鉄斧である。全長7.3cm、刃部最大幅3.2cmで、長さ3.5cm程の袋部を持つ。袋部の断面は2.6×1.8cmの扁平な隅丸方形を呈し、袋部の長軸付近に合せ目を持つ。

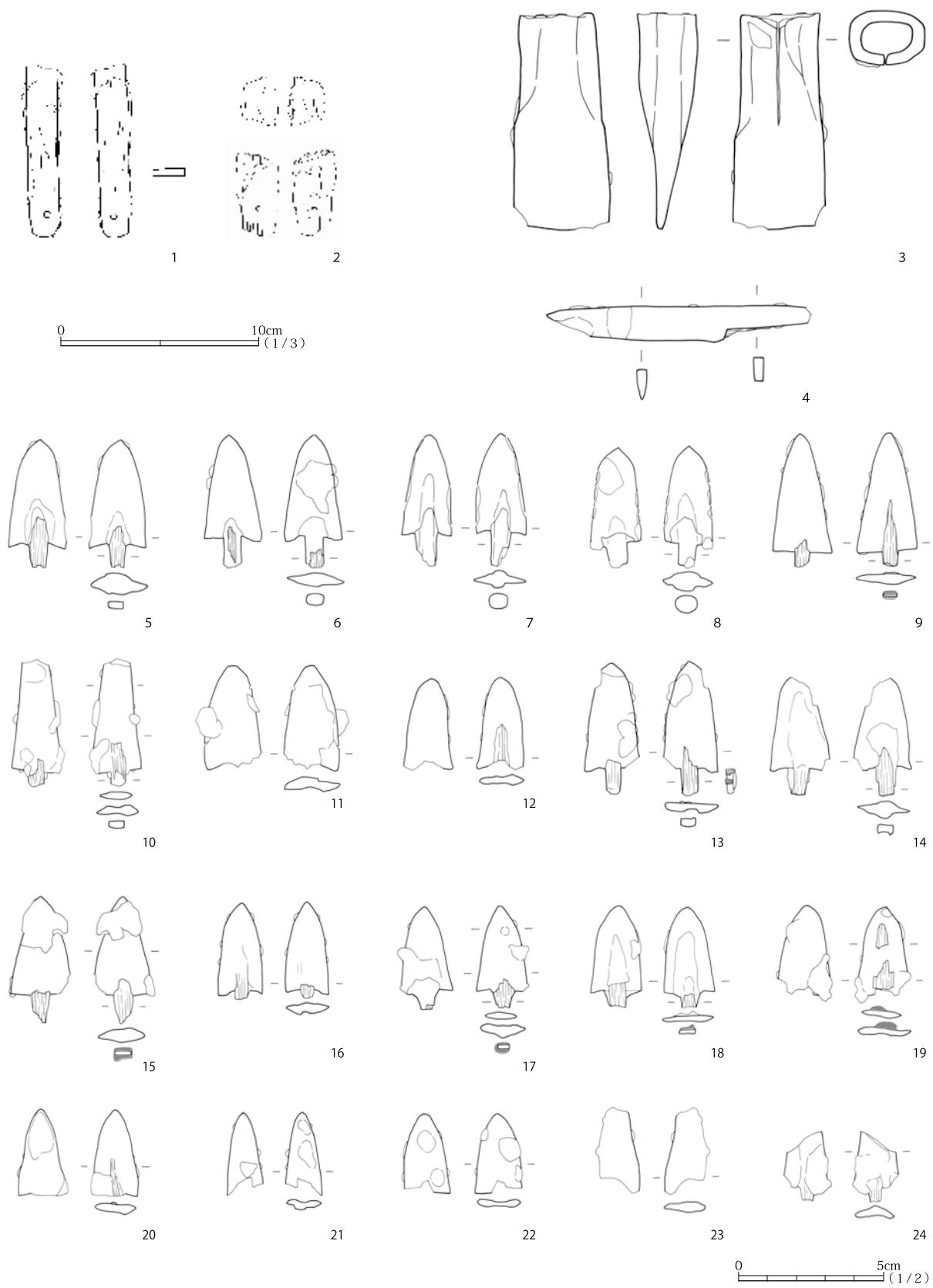
4は、刀子である。現存長9.1cm、刃部6.2cm、棟は直線的で刃部断面は三角形を呈する。目釘は確認されない。

鉄鏃は20点出土している（5～24）。いずれも短い茎を持つ浅い逆刺を有する長三角形の鉄鏃である。しかし、9・10のように逆刺がなく底辺が平らな長三角形も含まれる。全体的には、細長い形態のもの、やや身幅のあるもの、細長く逆刺のないもの、小型のものに分けられる。全長は3.25～4.5cm、刃長は2.8～4.1cm、刃幅は1.5～2.05cm、刃厚は0.2～0.4cm、逆差長は0.1～0.2cmとなる。茎長は最大1.25cm、茎幅は0.25～0.6cm、茎厚は0.1～0.3cmである。根ばさみの木質が残るものも見られる。

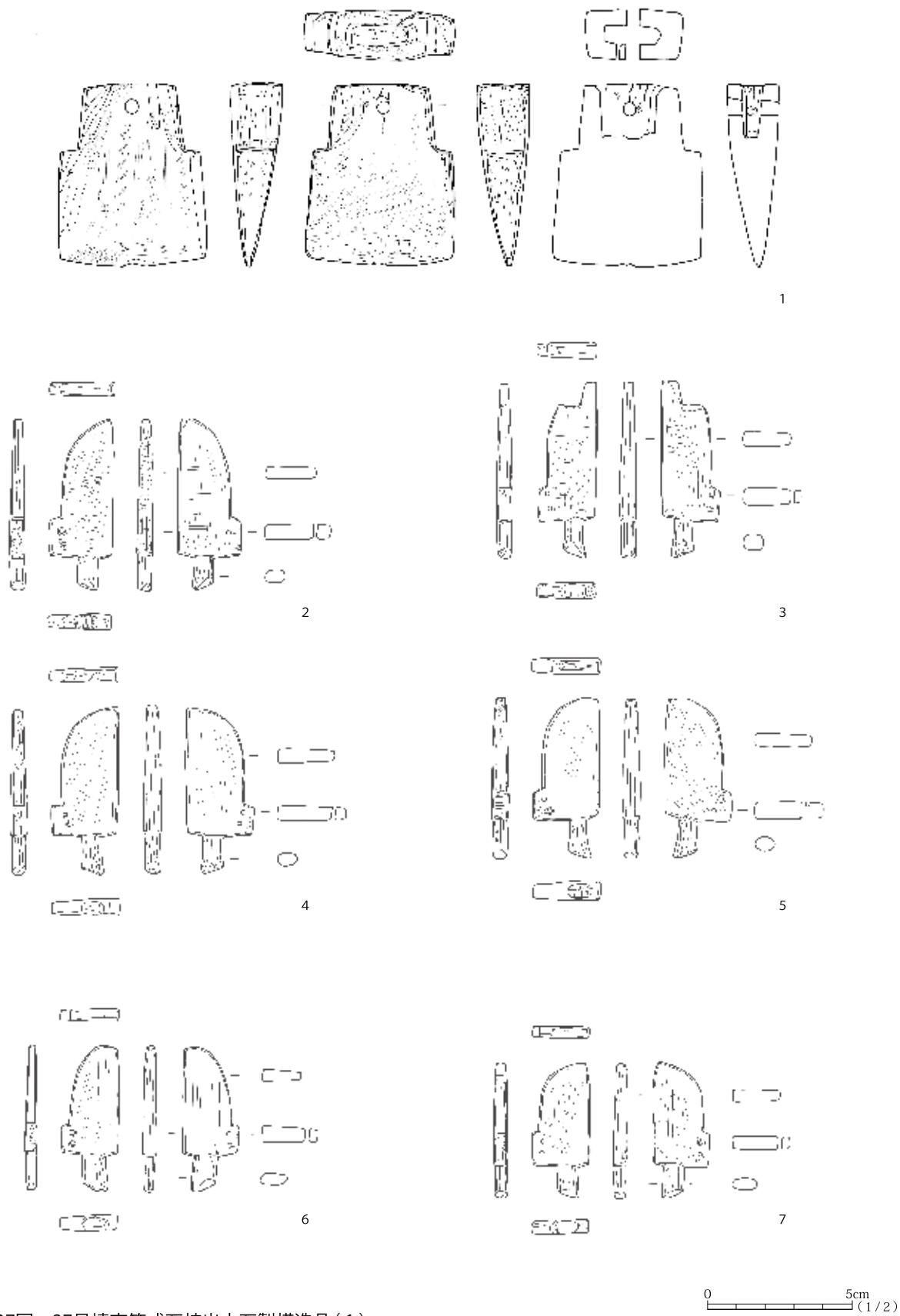
4. 石製模造品（第37～39図、図版12～14）

南箱式石棺出土の石製模造品は、斧形1点・刀子形6点・剣形19点・有孔円板24点である。剣形は形態的特徴から2つの類型に分類することが可能である。また、刀子形はそれぞれの特徴が共通しており、1つの類型として把握することができる。

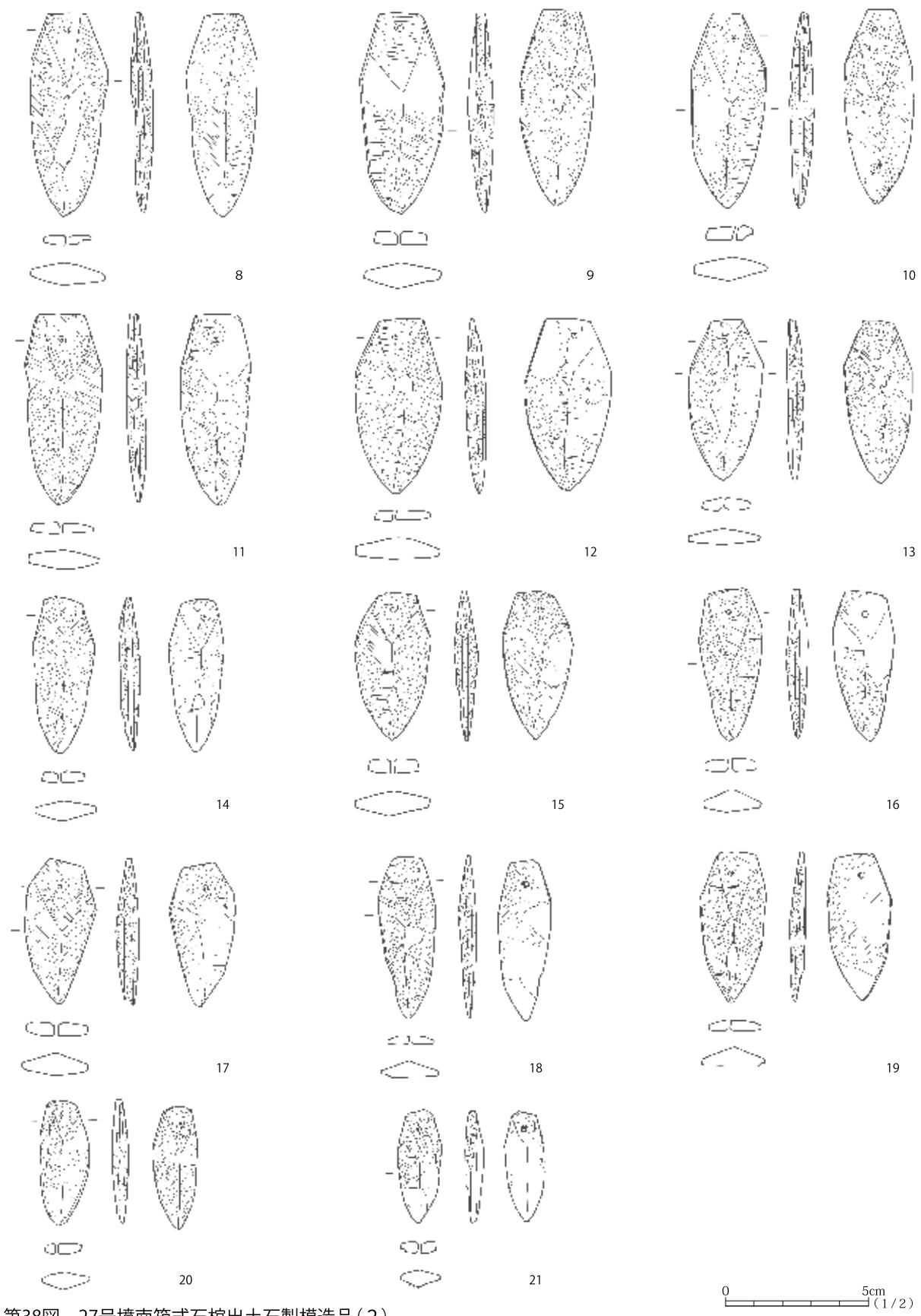
第37図1の斧形は、非常に丁寧な成形である。石材は緑色を呈している。全長6.15cm・刃部幅5.0cm・肩部幅4.8cm・袋部長2.3cm・袋部幅3.7cm・厚み1.8cmを測る。袋部は、中央に径5mmの両面から穿孔された貫通孔と、片面から袋部に貫通する径1.5mmの穿孔が見られる。この片面の中央には、縦位に線刻がなされて



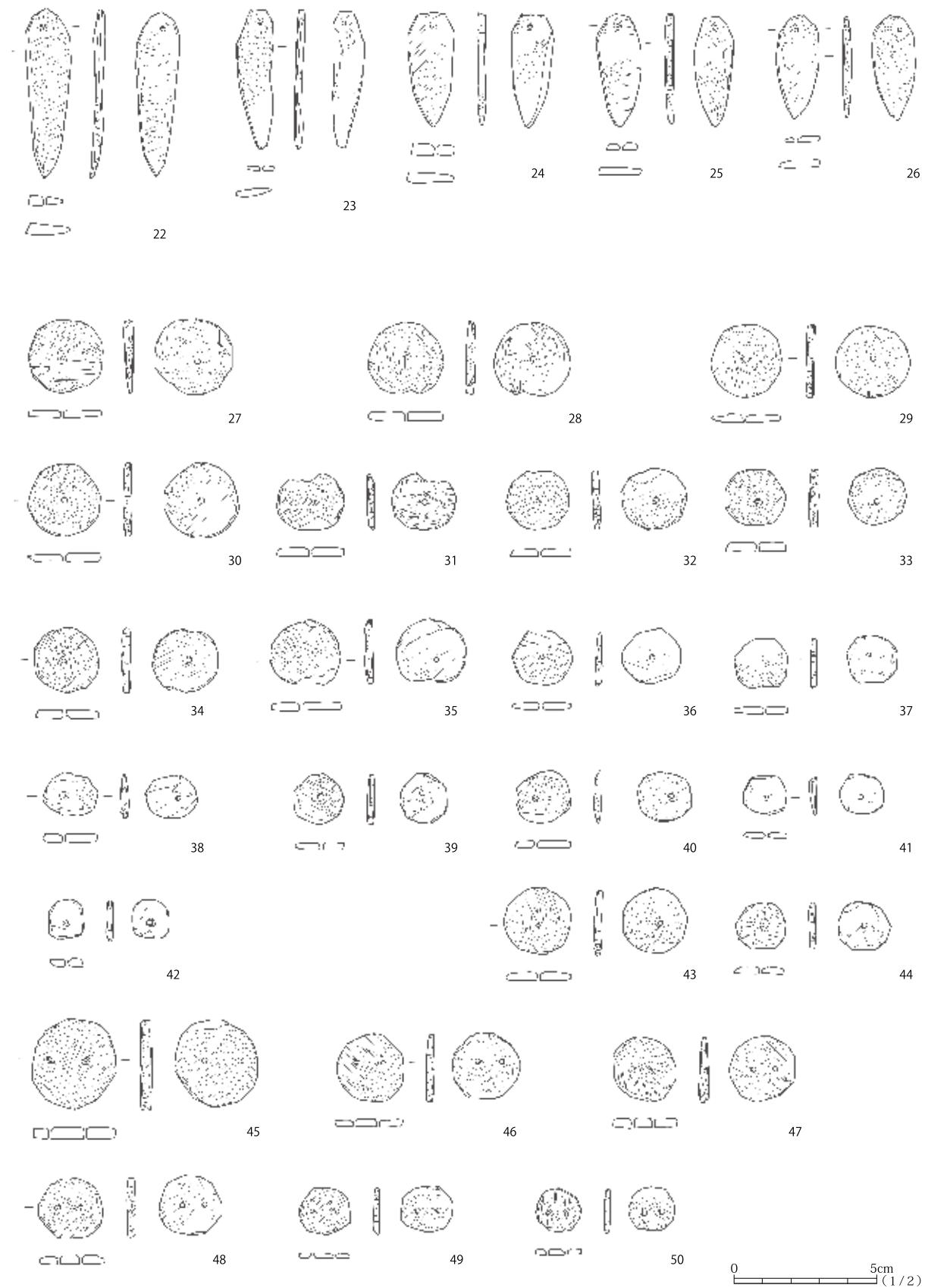
第36図 27号墳南箱式石棺出土鉄製品



第37図 27号墳南箱式石棺出土石製模造品(1)



第38図 27号墳南箱式石棺出土石製模造品(2)



第39図 27号墳南箱式石棺出土石製模造品(3)

いる。袋部の合わせ目を表現したものである。器面には両面ともに非常に弱い擦痕が観察される。実測図では表現困難であるが、光沢があり平滑に仕上げられている。

刀子形は、2～7の6点が出土している。石材は緑色を帶びた青色を呈し、極めて酷似しているため、同一母岩から作り出されたと考えられる。全長4.6～5.8cm、鞘部長3.5～4.7cm、把部長1.1～1.3cm、最大幅1.9～2.3cm、鞘部厚0.5～0.6cm、把部厚0.4～0.5cmである。表現は平板であるが、丸みを帶びた短い把部が鞘部から作り出されている。把頭には抉りは見られないが、把部の棟側は刃側より長いため、斜めに伸びる。穿孔は、方形突出部に2孔が穿たれている。この穿孔位置には、把側の孔が棟側に寄るもの（2～5）と、刃側に寄るもの（6・7）がある。前者は把部の先端がわずかに棟側に反っているが、後者には反りは見られない。また、前者は後者に比べ一回り大きいなど、わずかな形態上の差異が見られる。器面の調整は、砥石により整形の研磨を施した後、鉄製工具による工具痕が見られる。

剣形は19点あり、第38図8～21と、第39図22～26とに分類される。8～21は、平面形態は関が表現されず、茎に相当する部分が台形の突出部として表現される。断面形態は、菱形に近い六角形を呈し両面に鎧を持つもの（8～17・20・21）と、断面形が三角形に近い五角形を呈し片面にのみ鎧を持つもの（18・19）の二者が見られる。全長3.9～7.0cm、幅1.5～3.0cm、厚み0.6～0.9cmを測る。穿孔は全て片面穿孔である。石材はやや硬質で、いずれもわずかに緑色を帶びた青色を呈し同一母岩と思われる。断面形態からさらに分類が可能とも思われるが明確に分離することは困難で、平面形態と石材から同一の類型として把握している。また、8～21はその全てで表面に白色の付着物が見られる。

22～26は、平面形態は関が表現されず、茎に相当する部分が台形あるいは三角形の突出部として表現される。断面形態は、扁平な四角形で鎧は作り出されていない。全長3.6～5.9cm、幅1.2～1.6cm、厚み0.3～0.4cmを測る。穿孔は全て片面穿孔である。8～21に見られた白色の付着物は観察されない。

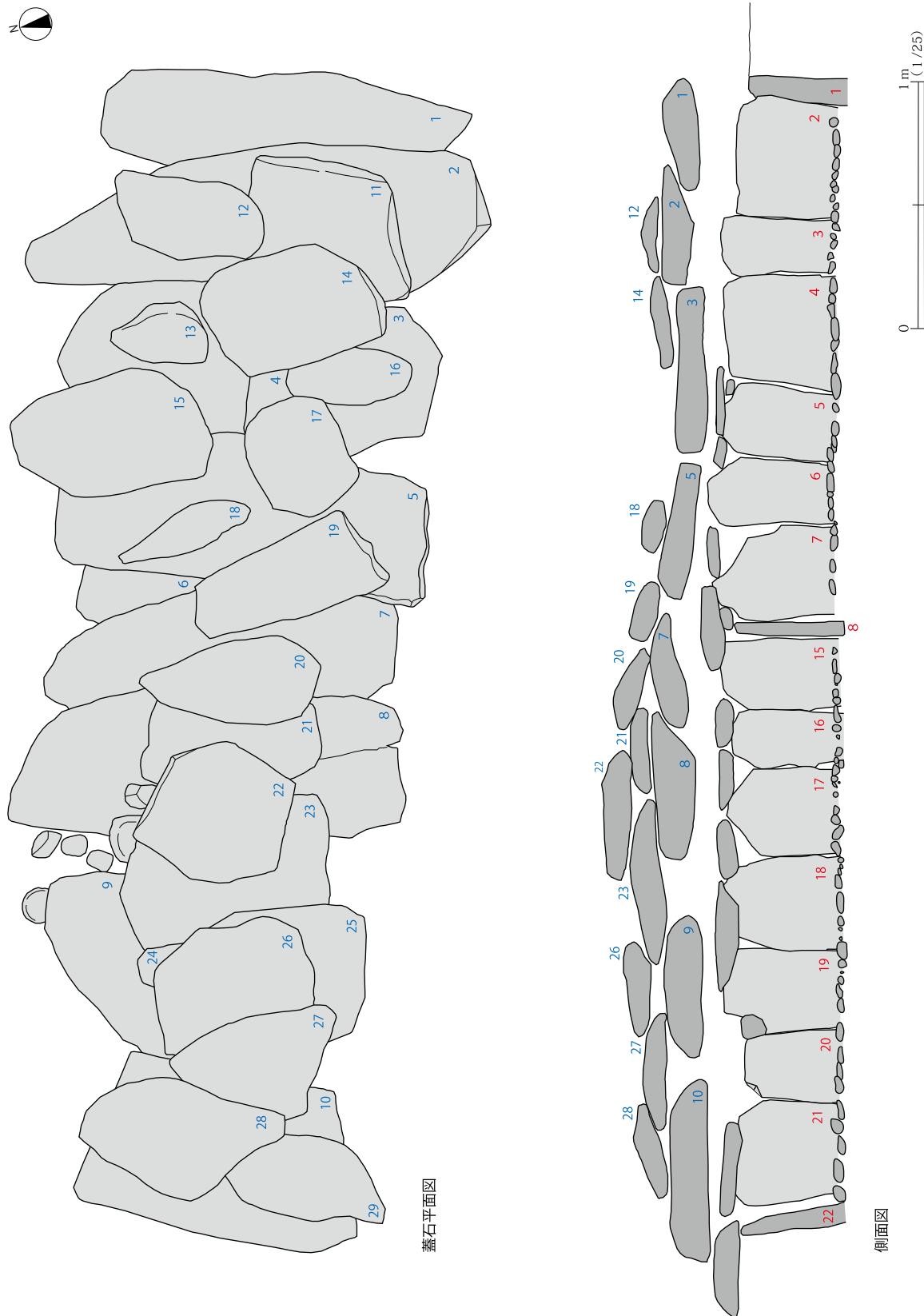
有孔円板は第39図の24点で、内訳は単孔が18点（27～44）、双孔が6点（45～50）である。単孔の円板は、穿孔は全て片面穿孔である。全長1.3～2.6cm、幅1.2～2.5cm、厚み0.2～0.3cmを測る。双孔の円板6点（45～50）は、いずれも青白色～青乳白色を呈している。穿孔は全て片面穿孔である。全長1.6～2.9cm、幅1.5～3.1cm、厚み0.2～0.4cmを測る。

（4）北箱式石棺（第40・41図、図版15～18）

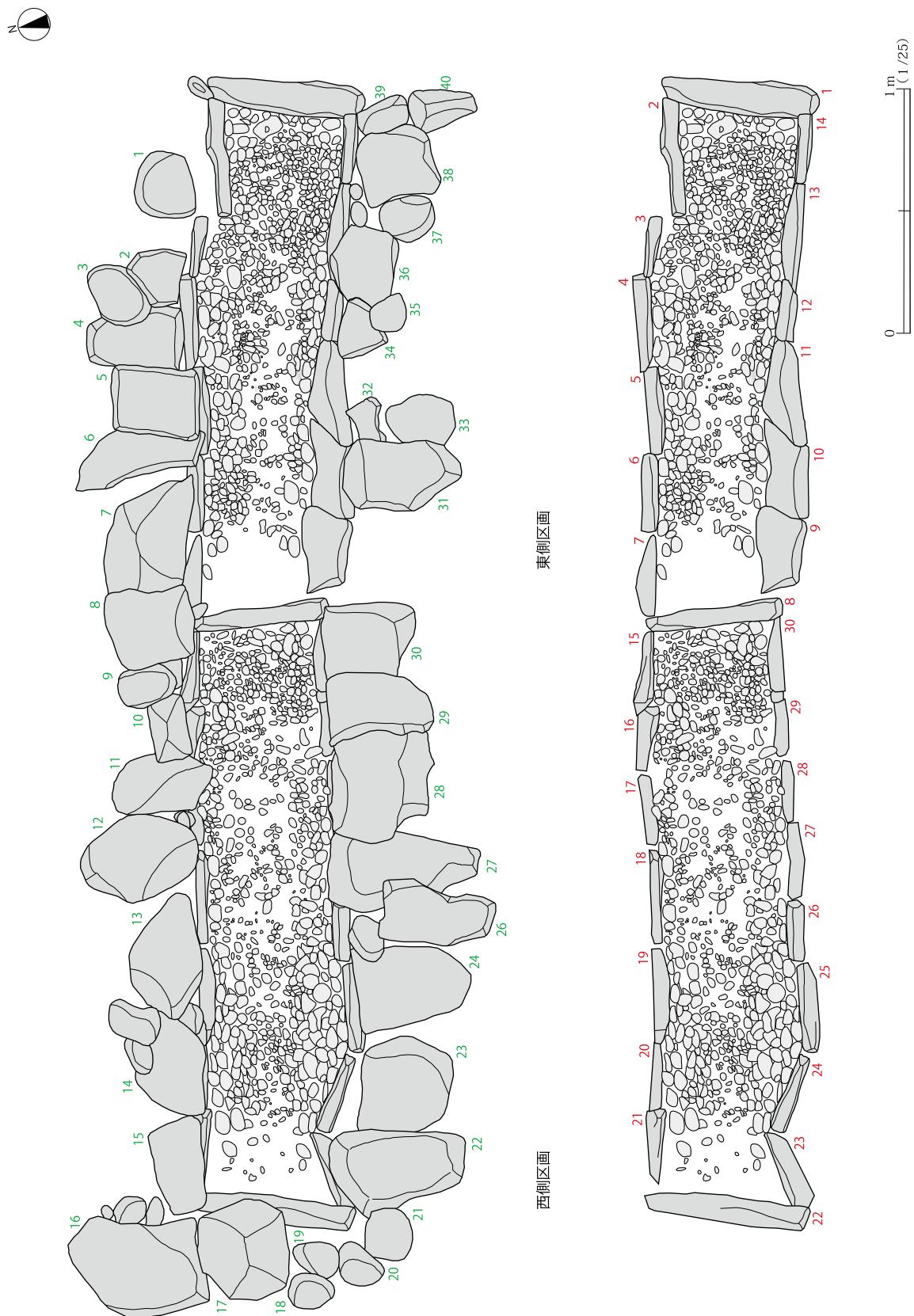
北箱式石棺は、南箱式石棺の約4m北側にある。北箱式石棺は縦長に用いた板石が立て並べられ、蓋石で覆われている。石棺の南北両側壁上に側壁に沿うように最大60×40cmの石を据え、それらの石の上部に掛かるように扁平な石をのせている。

蓋石は、東から第40図1～10の略長方形の石が石棺の長軸方向と直交するように、長軸を南北に向けて並べられる。最大の2は173×65cmである。その蓋石の上には、40～70cm前後の二回りほど小さい石（11～29）をのせている。石棺の中央部分では、三重に重なる状態となる。北箱式石棺の長軸規模は480cmを測る。通常の箱式石棺としては規格外の大きさであるが、その理由は、蓋石を取り除いた直後に明らかになる。

石棺は、内側中央部で東西長辺452cmを測り、中央部が板石で仕切られ、2つの区画に分けられている（第41図）。石棺内部は全面に赤彩がなされ、目張り粘土まで丁寧に一連の赤彩がなされていた。石棺の赤彩はベンガラであることが判明している。



第40図 27号墳北箱式石棺蓋石平面図・側面図



第41図 27号墳北箱式石棺側石・底石平面図

東側区画の規模は、内側中央部で東西長辺 208 cm、南北短辺 45 cm、床面からの高さは 47 cm を測る。また、東側短辺で 49 cm、西側短辺で 44 cm を測り、若干東側の幅が広い。石棺側壁を構成する石材は東壁にあたる石（1）が 66 cm、西壁にあたる仕切り石（8）が 55 cm である。北壁は、長さ 48 cm（2）・25 cm（3）・46 cm（4）・30 cm（5）・27 cm（6）・37 cm（7）の 6 枚の板石からなる。南壁は、長さ 28 cm（9）・30 cm（10）・43 cm（11）・20 cm（12）・42 cm（13）・30 cm（14）の 6 枚の板石からなる。床面には礫が敷き詰められているが、礫は側壁に近いほど大きくなる傾向にある。

西側区画の規模は、内側中央部で東西長辺 235 cm、南北短辺 51 cm、床面からの高さは 42 cm を測る。また、東側短辺で 51 cm を測るが、西側短辺で 53 cm である。石棺側壁を構成する石材は西壁 66 cm（22）である。北壁は東から 28 cm（15）・23 cm（16）・35 cm（17）・38 cm（18）・37 cm（19）・28 cm（20）・42 cm（21）の 7 枚の板石からなる。南壁は、西から 34 cm（23）・32 cm（24）・38 cm（25）・27 cm（26）・31 cm（27）・26 cm（28）・28 cm（29）・30 cm（30）の 8 枚の板石からなる。東側区画と同様、床面には礫が敷き詰められている。やはり礫は側壁に近いほど大きくなる傾向にある。

（5）北箱式石棺東側区画出土遺物

1. 東側区画遺物出土状態（第 42 図、図版 17）

北箱式石棺は両区画ともに土砂の流入はなく、遺物の遺存状態は良好であった。人骨は植物による浸蝕が顕著で、海綿質だけでなく骨表面の緻密質まで植物の根によって浸蝕されてしまい、かろうじて形をとどめているものもあった。そのため人骨は植物の根によって骨全体が包まれるようになっており、1 つの塊として取り上げられた。

東側区画では 1 体分の人骨が確認された。頭位を東に向けて、中央からやや東寄りで検出された。伸展の遺体が仰向けになり、頭部・腰骨・脛骨などが一面に草根状のもので覆われていた。頭蓋骨を囲むように 4 点の豎櫛（第 43 図 3～6）が歯を頭蓋骨側に向けて出土した。また、頭蓋骨から石棺の南東隅にかけて多数の石製模造品が出土している。石製模造品の内訳は剣形 23 点、有孔円板 14 点で、これらに混じり滑石製臼玉 673 点、ガラス小玉 7 点が出土している。直刀（第 43 図 1）は人骨の南側で先端を西に向かって、人骨に並行になるように副葬されている。直刀は、発見当初は木質の痕跡も確認されている。有袋鉄斧（第 43 図 2）は、石棺の北側で先端を西に向けて、やはり人骨に並行になるように副葬されている。

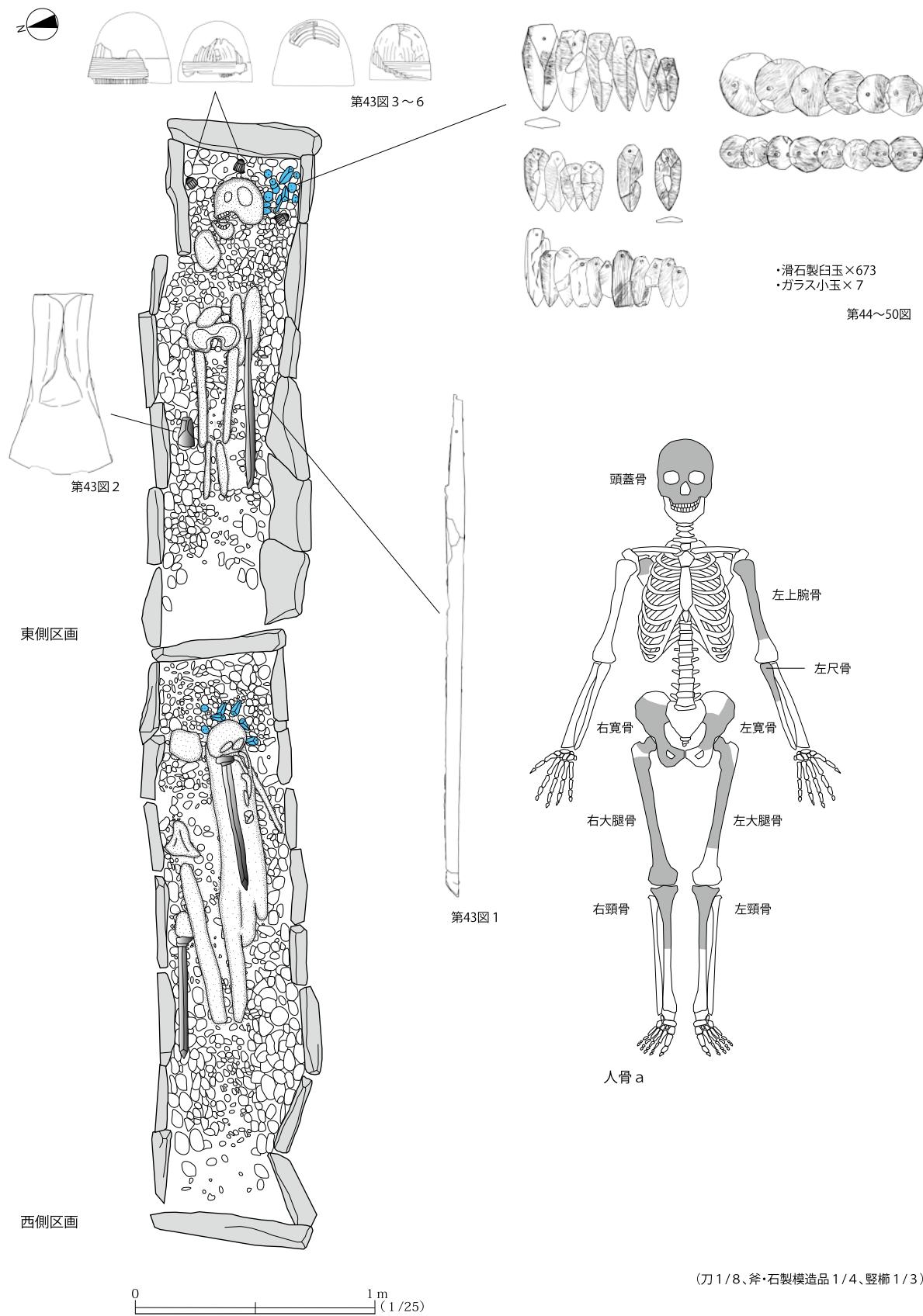
2. 人骨 a（第 42 図、図版 17）

北箱式石棺東側区画からは比較的状態の良い頭蓋骨が出土した。左側側頭部が欠損しているものの、顔面及び左の前頭にかけて赤色顔料が付着していることが観察できる。眼窩上隆起が発達していることから男性のもので、歯の摩耗が少ないので若い人物だと考えられる。顔面は平坦で、歯槽性の突顎であるという。下顎骨は出土していないものの、上腕骨は左側の近位部分が残り、骨体は頑丈である。人骨は頭蓋骨や上腕骨などの頑丈さから男性、年齢は 30 歳前後で、壮年に属すると推測される。

3. 直刀・斧・豎櫛（第 43 図、図版 19）

直刀が 1 点出土している（第 43 図 1）。残存長は 68.7 cm で、刃部長は 55.8 cm である。関付近の身幅は 2.6 cm である。目釘孔は 2 つあり、4.2 cm の間隔で開いている。

斧は、有袋鉄斧が 1 点出土している（第 43 図 2）。全長 12.2 cm、刃部最大幅 7.2 cm で、長さ 7.0 cm 程の袋





第43図 北箱式石棺東側区画出土鉄製品・豎櫛

部を持つ。袋部の断面は4.1×3.1cmの扁平な隅丸方形を呈す。袋部の長軸付近に合せ目を持つ。

堅櫛は、4点出土した（第43図3～6）。いずれも頭（ムネ）部分の破片で櫛歯の部分は残存していない。残存状態は悪く、厚く塗布された漆によりかろうじて形状をうかがうことができる。薄く細長いひごを重ね、中央を糸でかがり折り曲げ、頭部下端でひごを巻き付ける。3は20本の歯が確認できる。5は残存長2.8cmで幅が3.1cmを測る。

4. 石製模造品（第44・45図、図版20・21）

北箱式石棺東側区画出土の石製模造品には、剣形23点、有孔円板14点があり、この他臼玉673点がある。

剣形は、平面形態・断面形態・石材の特徴などから1～6、7～10、11、12、13～18、19～23の6類に分類される。

第44図1～6は、平面形態は関が表現されず、茎に相当する部分が台形の突出部として表現される。断面形態は、菱形に近い六角形を呈し両面に鎧を持つもの（1・2）と、断面形が三角形に近い五角形を呈し片面にのみ鎧を持つもの（3～6）の二者が見られる。全長4.2～5.8cm、幅1.6～2.7cm、厚み0.5～0.8cmである。穿孔は片面穿孔である。石材はいずれもわずかに緑色を帯びた青色を呈し、同一母岩と思われる。断面形態からさらに分類が可能とも思われるが、平面形態と石材から、同一の類として把握している。1～6の全てに白色の有機物が付着していた。

7～10は、平面形態は関が表現されず、茎に相当する部分が台形の突出部として表現される。断面形態は、菱形に近い六角形を呈し両面に鎧を持つもの（7）と、三角形に近い五角形を呈し片面にのみ鎧を持つもの（8～10）の二者が見られる。全長3.3～4.2cm、幅1.6～1.7cm、厚み0.5～0.6cmである。穿孔はいずれも片面穿孔である。石材の色調は青灰色を呈す。白色の物質は付着していない。

11、12についても、茎に相当する部分が台形の突出部として表現される。断面形態は11が菱形に近い六角形を呈し両面に鎧を持ち、12は三角形に近い五角形を呈し片面にのみ鎧を持つ。11は全長4.6cm、幅1.7cm、厚み0.6cmである。12は全長4.3cm、幅1.8cm、厚み0.4cmを測る。穿孔は片面穿孔である。いずれも白色物質は付着していない。

13～18は、茎に相当する部分が台形に近い突出部として表現される。断面形態が扁平な四角形で鎧は作り出されていない。全長3.3～5.3cm、幅1.3～1.8cm、厚み0.3～0.5cmである。穿孔は片面穿孔である。色調は青灰色～青白色を呈している。白色の物質は付着していない。

第45図19～23も、茎に相当する部分が台形に近い突出部として表現されるものである。断面形態が扁平な四角形で鎧は作り出されていない。全長は短いもので2.7cm、幅1.1～1.6cm、厚み0.2～0.4cmを測る。穿孔は片面穿孔である。色調は青灰色～青白色を呈している。白色物質は付着していない。

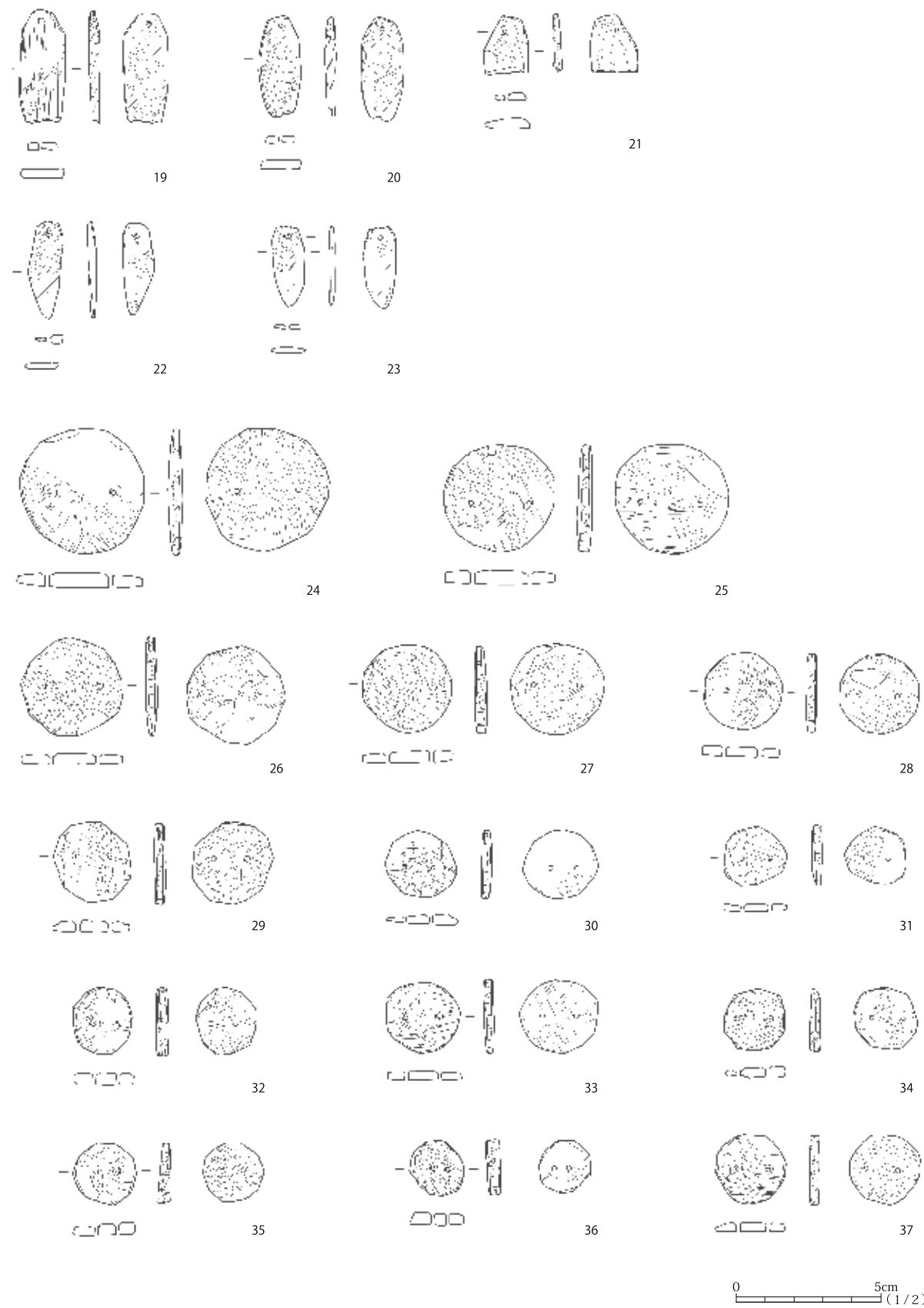
有孔円板は全て双孔で、14点出土している（第45図24～37）。穿孔は全て片面穿孔で、双方の孔はともに同一の面から穿孔が行われている。全長1.9～4.2cm、幅1.9～4.2cm、厚み0.3～0.5cmを測る。24～36は青灰色～青白色を呈しやや硬質の石材であるのに対し、37のみ青白色～青乳白色を呈し軟質で、異なる石材と思われる。24～36のうち11点（24・26・28～36）には、表面に白色物質が付着している。

5. 臼玉・ガラス小玉（第46～50図、図版22）

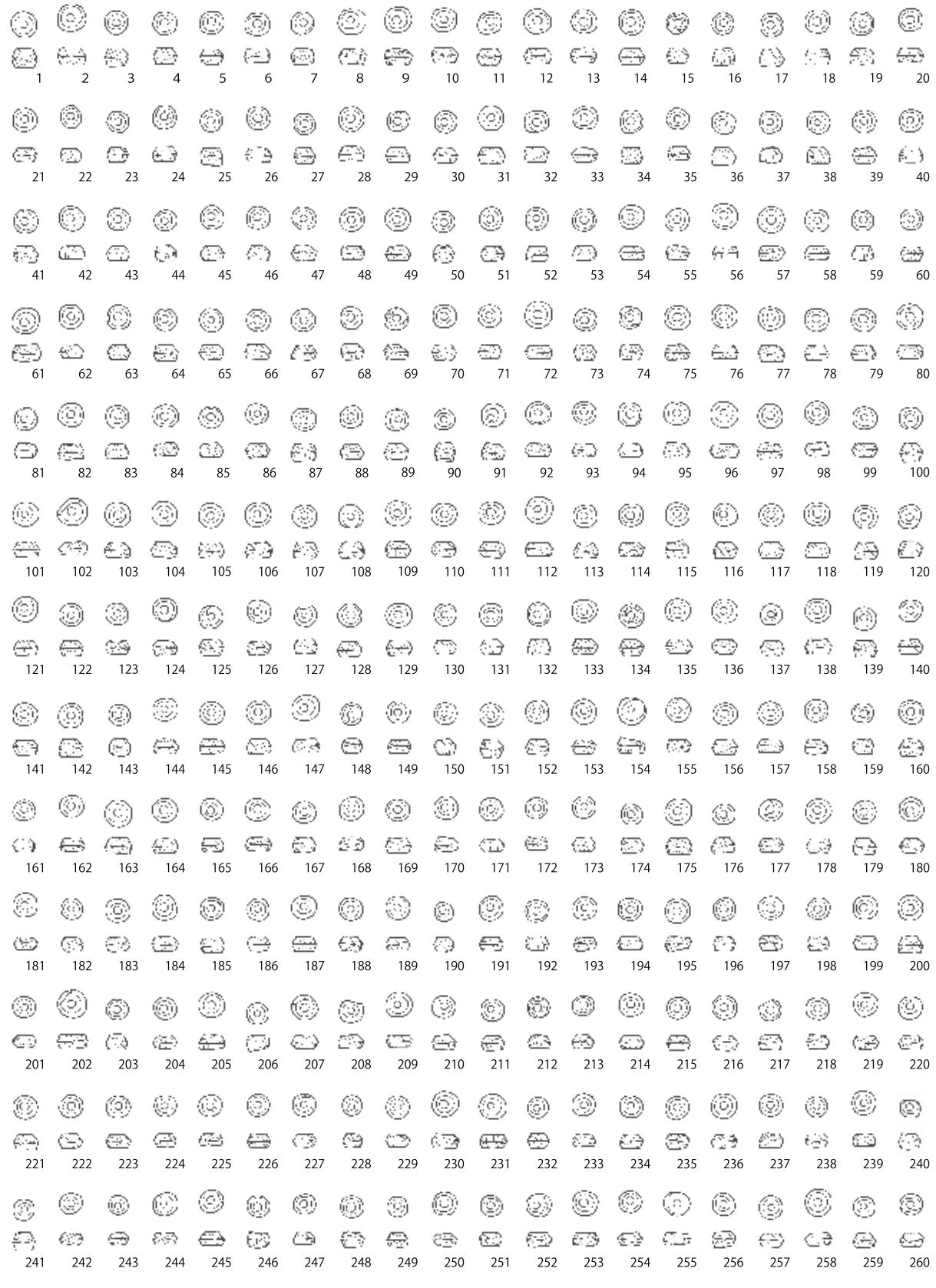
27号墳の臼玉を観察するにあたり、その分類基準を示す。先行研究により側面の形状が時間差を示す属性と考えられるため、最も重視したのは側面の形状である。また形状を最終的に決定するのは、整形を目的とす



第44図 27号墳北箱式石棺東側区画出土石製模造品(1)

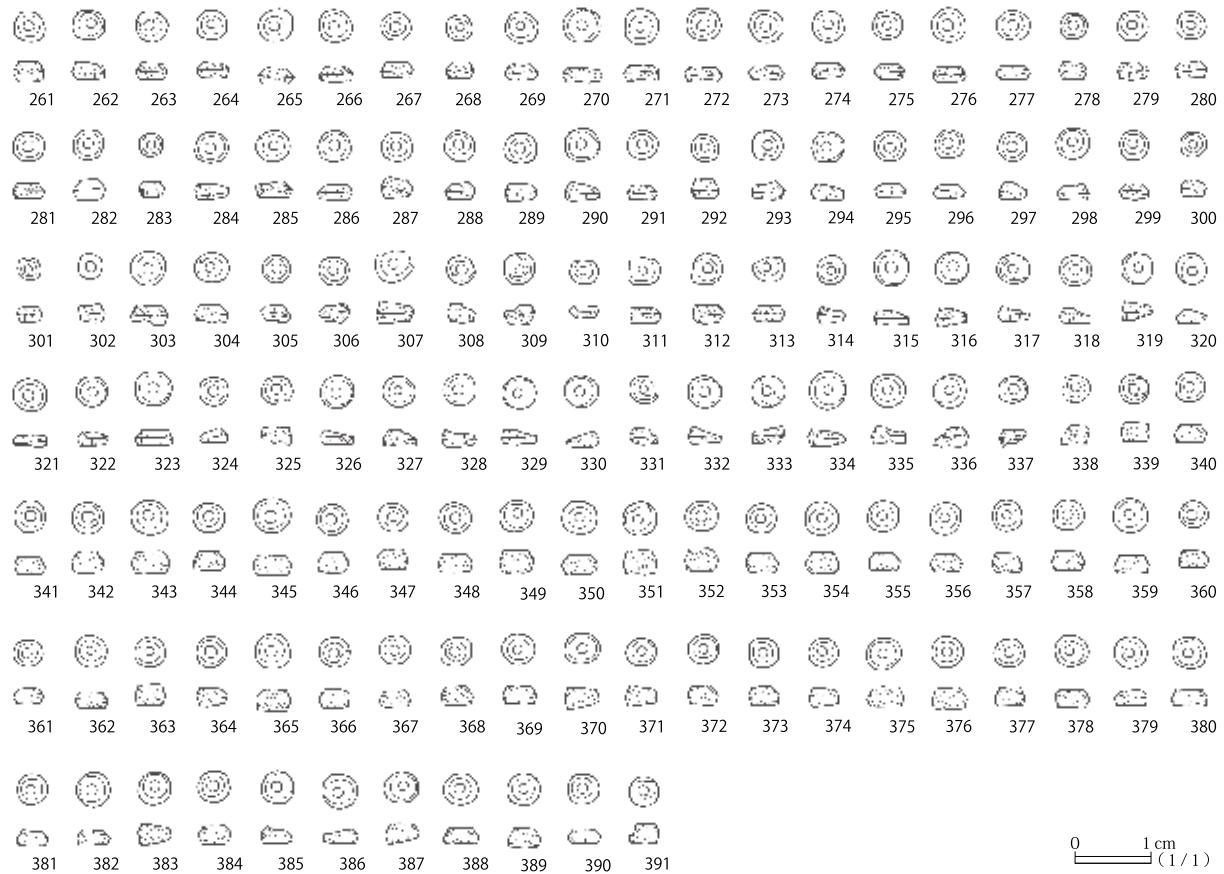


第45図 27号墳北箱式石棺東側区画出土石製模造品(2)



第46図 27号墳北箱式石棺東側区画出土臼玉A 1類(1)

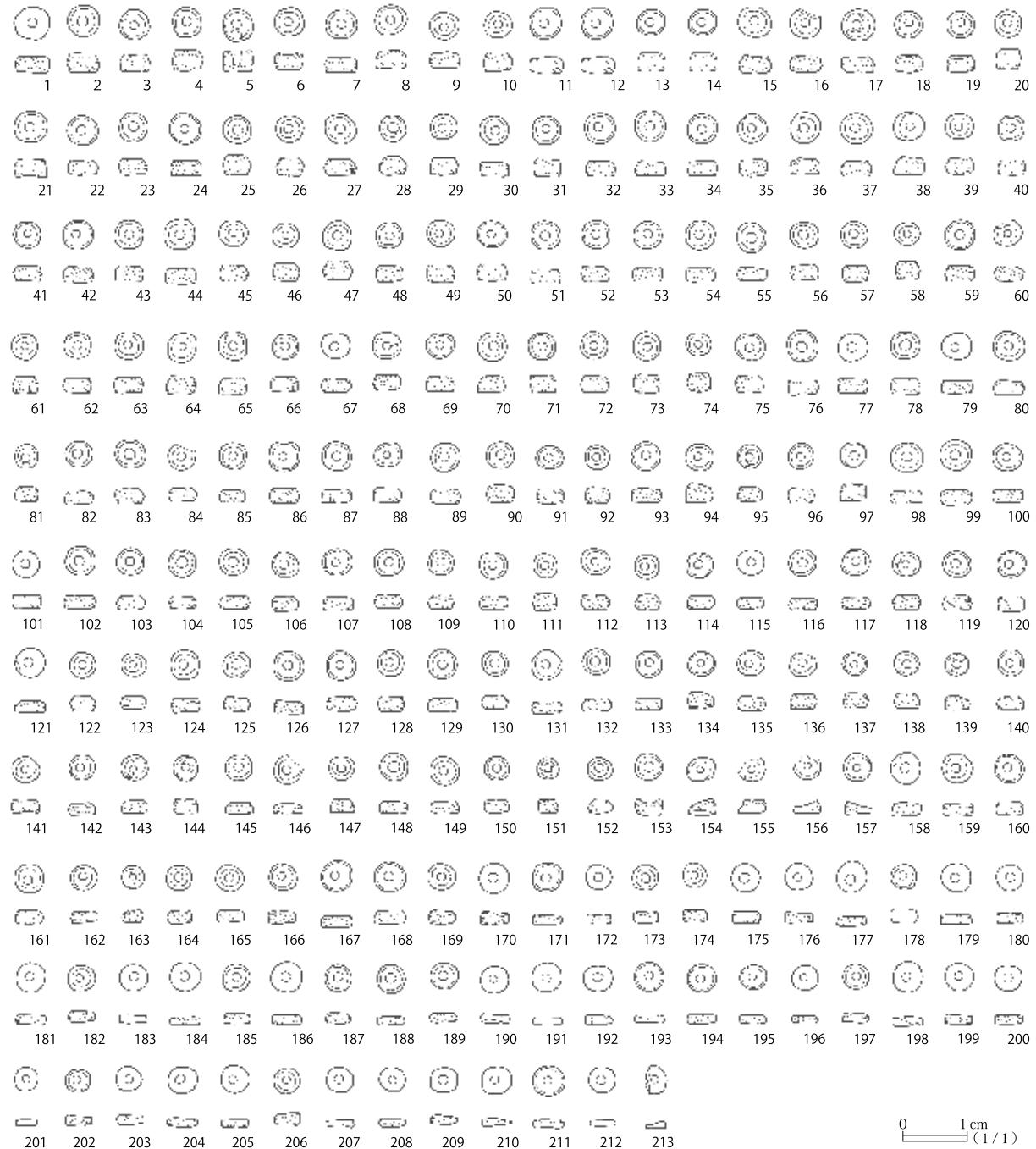
0 1 cm
(1/1)



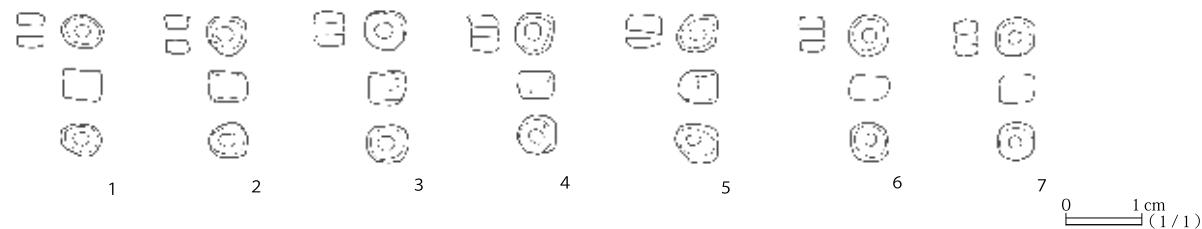
第47図 27号墳北箱式石棺東側区画出土白玉A 1類(2)



第48図 27号墳北箱式石棺東側区画出土白玉A 2類



第49図 27号墳北箱式石棺東側区画出土臼玉B類



第50図 27号墳北箱式石棺東側区画出土ガラス小玉

る研磨によるところが大きいと考えられるため、側面の擦痕に注意した。

A 1類は断面形が算盤玉形を呈するものである。稜線はほぼ中央に見られるが、比較的明瞭なものと不明瞭なものがある。擦痕は斜方向で、両端部それぞれから研磨されている。A 2類は側面に稜を有するものの、稜線が中央から縁辺部に寄った位置で見られる。稜線が比較的明瞭なものと、不明瞭なものがある。擦痕は斜方向で、両端部それぞれから研磨されている。なお、同類の中にはほぼ台形に近い形態のものも見られる。B類は中央部がわずかに膨らみ太鼓状を呈するものを一括する。側面の擦痕は斜方向で、両端部それぞれから研磨されていることが分かる。

側面の研磨の特徴として上げられるのは、研磨が両方の端部から行われていることである。これはA類に最も特徴的であり、側面に稜線を有する算盤玉形を意図する場合は、当然方向を変えての二段階の研磨が必要となる。また、明瞭な稜線を形成しないB類の場合も同様に方向を変えての研磨が行われている。

B類については、その多くは明確な太鼓状を呈するものは少ない。また、Aとの区別が曖昧となるものも含む。そのため、本来は算盤玉形を意識しながらも、必要な厚さが得られなかつたことなどから、明瞭な稜線を持つ算盤玉形に至らなかつた可能性もある。

北箱式石棺東側区画からは、総数 673 点の臼玉¹⁾が出土した(第 46~49 図)。臼玉の内訳は A 1類が 391 点、A 2類が 69 点、B類が 213 点となる。直径は 3.0~4.0 mm、厚さは 2.0~4.0 mm を測る。

ガラス小玉は、北箱式石棺東側区画からは 7 点出土している。第 50 図 1 が紺色系で、他は全て淡青色系である。平面形は円形を基調とするものと、方形を基調とするものがある。直径 4.5~5.5 mm、厚さ 3.0~4.0 mm を測る。出土したガラス小玉のうち気泡列が確認されるものは、全て主軸方向と並行していることが分かる。これはガラスの塊を加熱し管状に伸ばした際、主軸方向に気泡の列が伸び、切断後再加熱し成形する際に気泡の筋が気泡の列に変化したものである。このことから管切り技法と考えらえる。

(6) 北箱式石棺西側区画出土遺物

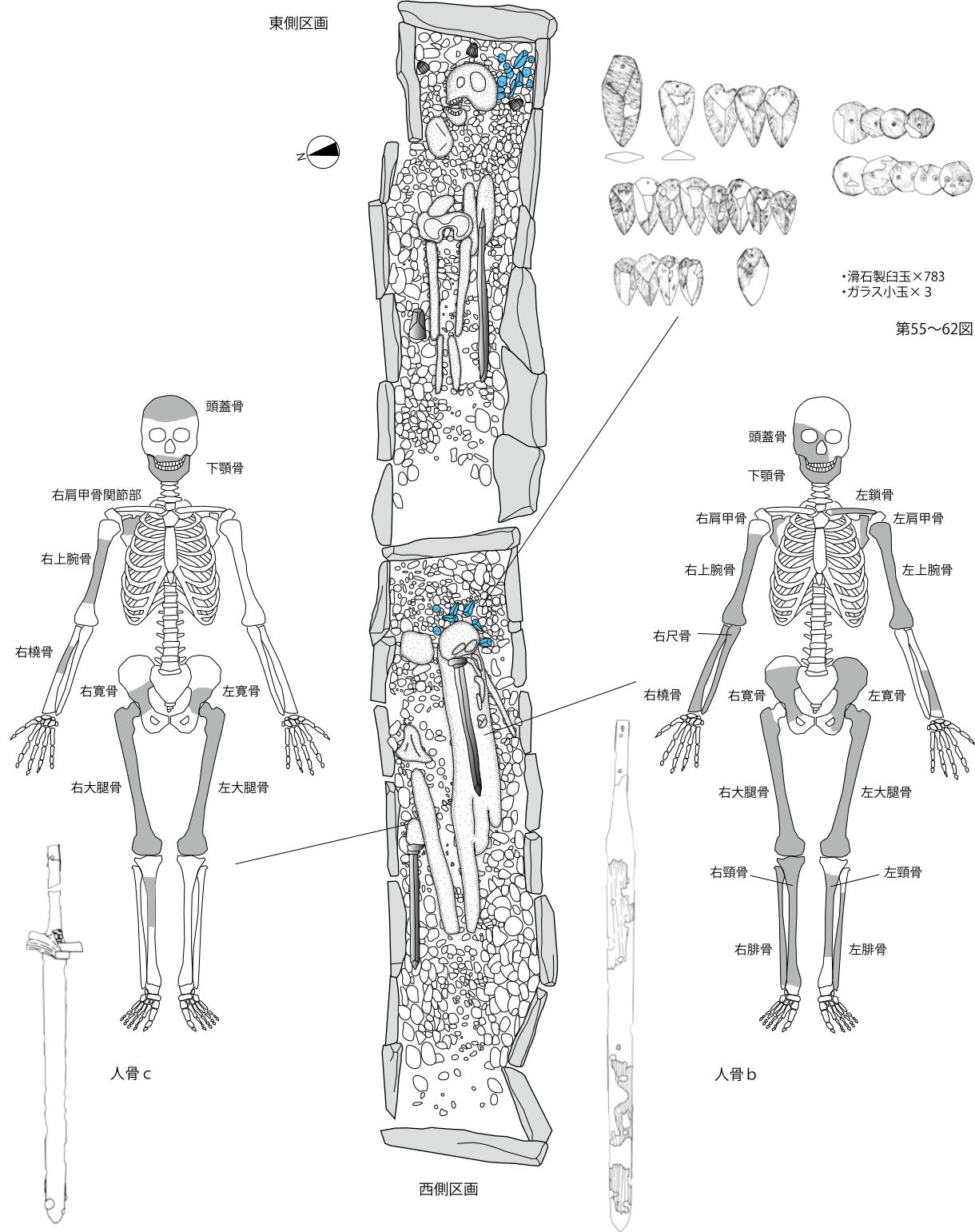
1. 西側区画遺物出土状態 (第 51 図、図版 18)

西側区画では人骨が 2 体分確認されたが、遺存状態は良くない。東側区画と同様、草根に覆われて確認されている。石棺の東寄りの位置、仕切り石から 25 cm 付近で石製模造品がまとまって出土している。そのやや西側で先端を西側に向けて剣が 1 点出土している。また、北壁付近でも西に先端を向け剣が出土している。前者は人骨の上に、後者は人骨と側壁の間に副葬されている。また頭蓋骨周辺から多数の石製模造品が出土している。石製模造品の内訳は剣形 18 点、有孔円板 9 点で、これらに混じり滑石製臼玉 783 点、ガラス小玉 3 点が出土している。

2. 人骨 b (第 51 図、図版 18)

西側区画の南側からは、全身に近い人骨が出土した。頭蓋骨は顔面の右半分から右側頭骨にかけて残存し、額は平坦で「女性的」であるという。歯槽性の突顎は見られない。

上肢骨では、肩甲骨が左右ともに出土しているが、部分的に残存するのみである。左鎖骨・上腕骨ともに細くきやしやで、左の上腕骨の方がやや太い。前腕骨は右だけしか残っていない。下肢骨のうち、左寛骨では表面の骨質が失われている部分が多いものの、右寛骨は腸骨部が残っている。妊娠の痕跡の経験があることを示す痕跡(耳状面前溝)が認められるという。大腿骨及び頸骨長から推定された身長は 157 cm 前後となる。この



第51図

第52図 1

0 1 m (1/25)

(剣 1/8、石製模造品 1/4)

第51図 27号墳北箱式石棺西側区画遺物出土位置図

他、詳細は不明ながら、脊柱骨と肋骨と思われる部分の骨も残る。

全体的な特徴として、人骨はきやしやで妊娠歴のある女性と推測される。

3. 人骨c (第51図、図版18)

西側区画の北側からも遺存状態は良くないものの、人骨が出土している。頭蓋骨は植物による浸蝕が顕著である。歯も同様で歯冠のエナメル質が部分的に剥がされているものが多い。上肢骨では、右上腕骨が出土している。状態は悪いものの、比較的頑丈である。なお右肩甲骨の関節部が出土しているが、やや小さめである。下肢骨では寛骨の一部が出土し、大腿骨は両側が出土している。推定身長は158.4cmである。

この人骨の性別判定は、頭蓋骨や寛骨の出土が部分的であることなどから、かなり難しいという。明確ではないが、女性の可能性が高いとの指摘がある。熟年であり、出土した3体の中では最も年長の可能性がある。

4. 鹿角装剣 (第52~54図、図版23~25)

剣が2点出土している。第52図1は、全長67.7cm、刃部長は52.2cm、関部の幅は3.7cmである。茎は長さ15.5cmで茎尻に向かって緩やかに先細りする。断面は扁平な矩形である。目釘孔は2つあり4.2cmの間隔で開いている。鞘材の木質が付着している。2の剣は、把縁装具が装着された状態で出土している。残存長は50cm、関部付近の幅は2.9cmである。茎は茎尻に向かって緩やかに先細りする。断面は扁平な矩形である。目釘孔は確認されない。

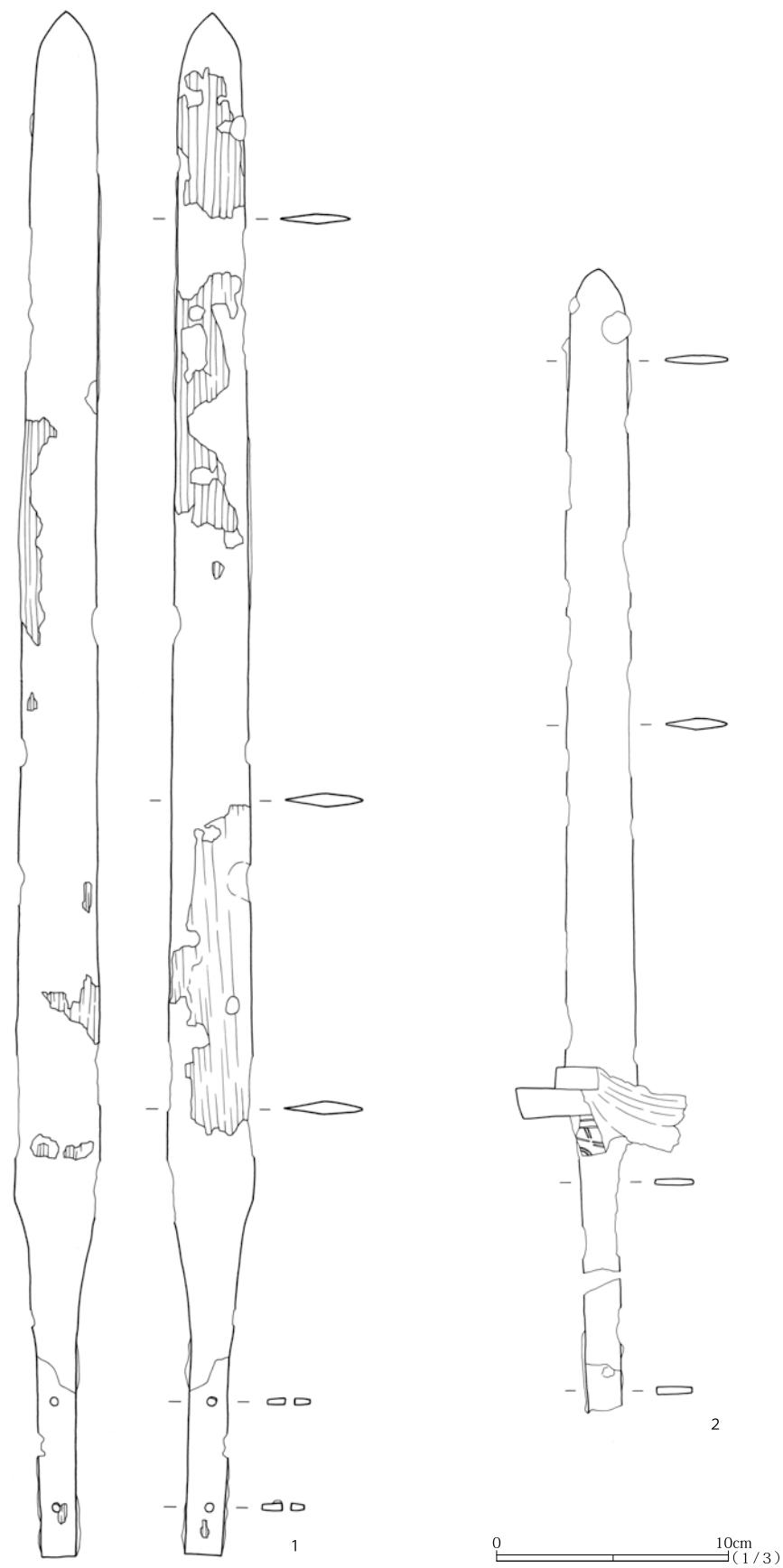
鹿角製刀剣装具は9点が遺存している。このうち把縁装具以外の装具については、どちらの剣の装具となるのか判然としないものもある。

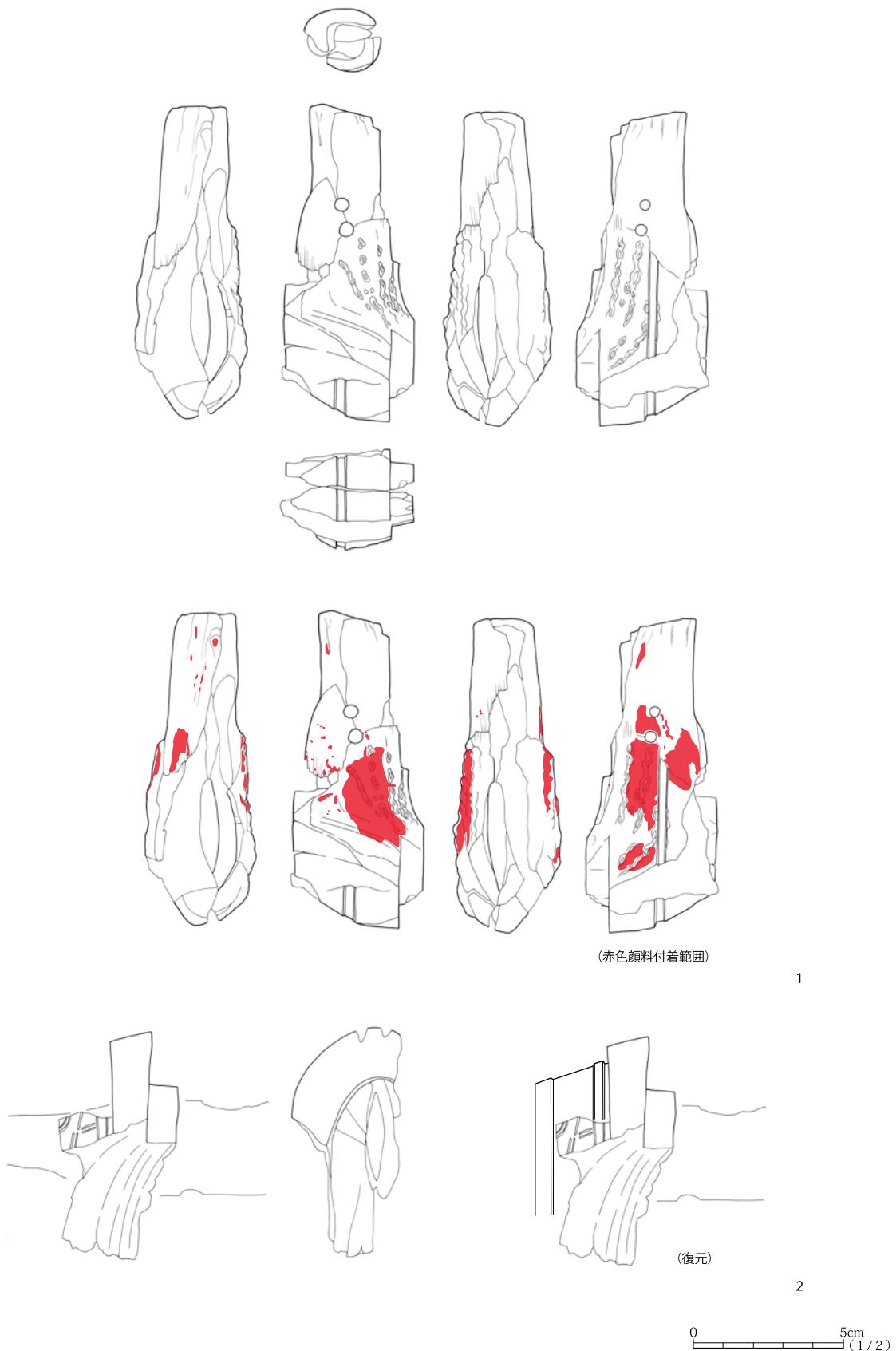
把縁装具は2点出土した。第53図1は剣1に装着されていたと考えられる。楕円形の本体部と尾側の鞘口装具に挿入される突起部、背側の柱状突出部からなる。全長10.5cm、幅4.3cm、厚さ3.7cmを測る。角幹の基部から第1枝にかけて最も幅広の部位が利用されている。柱状突出部から本体にかけて鹿角特有の自然面が顕著に残る。尾側突起部の断面形は倒卵形をなす。柱状突出部は頭側に向かって伸び、先端は斜めに加工され平坦面を形成する。楕円形を呈する先端は2.4×2.0cmを測り、突出部先端の尾側は段状に加工されている。柱状突出部の中央に2孔一対の紐通しの潜り孔が穿たれている。直弧文などの文様はなく、鹿角本来の自然面のままである。本体部分を中心に赤色顔料の付着が明瞭である。2は剣2に装着されている。片面のみ残り遺存状態は良くない。楕円形の本体部と尾側の鞘口装具に挿入される突起部が残り、残存長7.7cmを測る。鞘口の突起部は1.0cmである。把側には、幅0.2cmほどの溝により無文帯と画されて、直弧文帯が認められる。直弧文はわずかに凹められた平坦面に彫り込まれているが、かろうじて残るのみである。わずかに赤色顔料が付着している。

把頭装具と考えられるものは2点である。第54図3は、円筒形で残存長5.0cmを測り、側面観はわずかに平行四辺形を呈している。断面形は頭側が円形に近くその径は3.3cmを測り、尾側は隅丸方形に近い。頭側の端部に0.5cm程の切れ込みがあり、尾側に寄った位置の短軸方向に径0.3cmの2孔一対の紐通しの潜り孔が穿たれている。切れ込みに赤色顔料が付着していた。表面の状態は良好ではないため、鹿角本来の自然面は残していないが、直弧文などの文様は施されていない。4は、4.8cmほどが残存する破片で、長軸方向に2孔の潜り孔が穿たれていることが分かる。

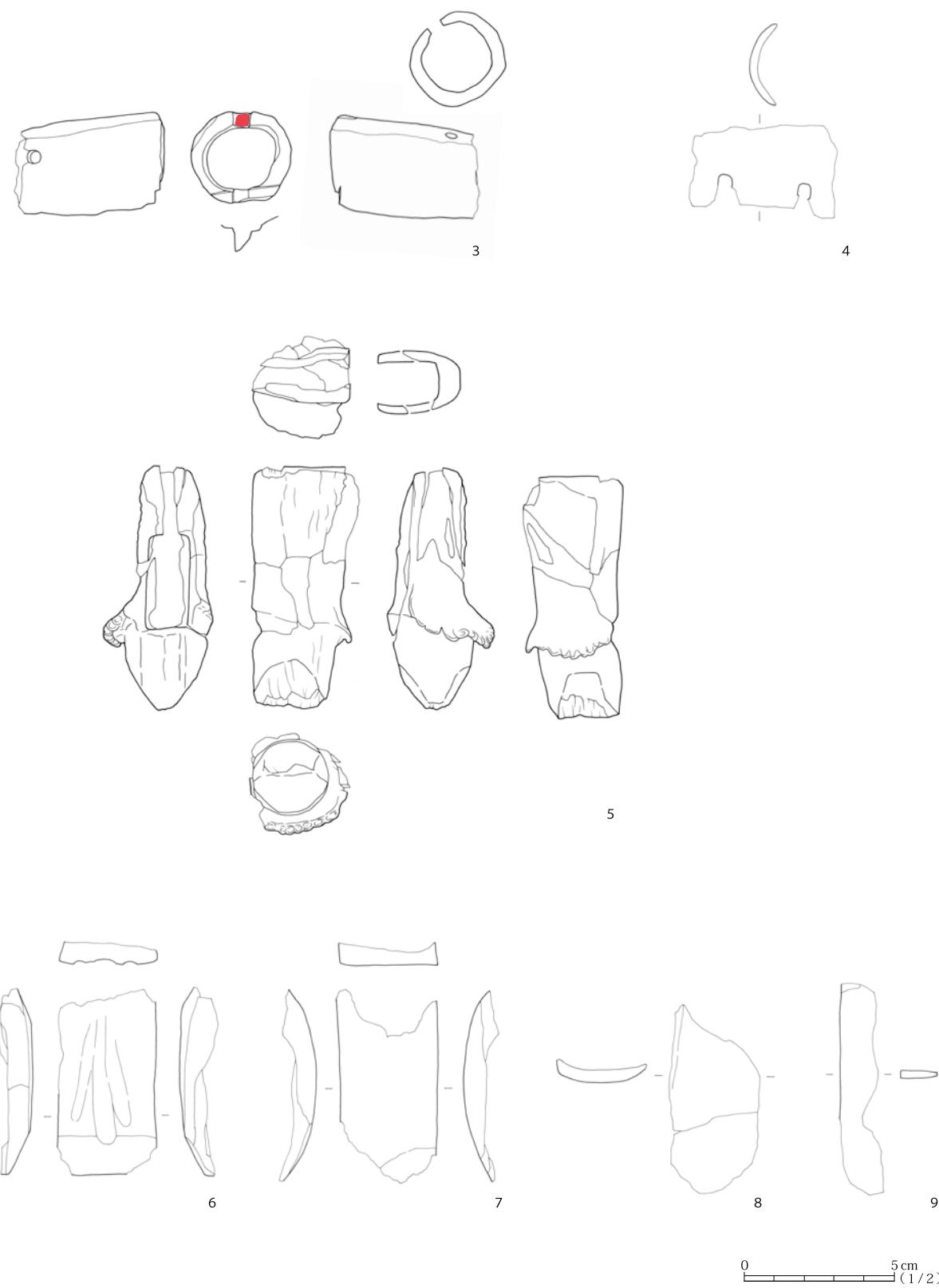
鞘尻装具は、第54図5の1点がある。全長8.0cm、幅3.2cm、中央部の厚さ2.4cmを測る。頭側面は平滑に加工しているが、角座骨から第1叉（第一枝分岐部）にかけての部分が利用され、角座が明瞭に残る。外面

第52図 27号墳北箱式石棺
西側区画出土鉄剣





第53図 27号墳北箱式石棺西側区画出土鹿角装具(1)



第54図 27号墳北箱式石棺西側区画出土鹿角装具(2)

には直弧文を刻まず、鹿角本来の自然面を多く残している。頭側面には鞘木を挿入するために 3.1×1.5 cm、深さ 2.0 cm の長方形の孔を穿っている。

鞘口装具と確認される明確な資料はないが、細長で表面がやや平板な資料があり、これらが鞘口装具の可能性がある（第54図6～9）。6は残存長 $6.0 \times$ 幅 3.2 cm、7は残存長 6.2×3.2 cm で、両者は幅が等しくなる。

5. 石製模造品（第55・56図、図版26・27）

北箱式石棺西側区画出土の石製模造品には、剣形18点と有孔円板9点がある。

剣形は18点あり、平面形態・断面形態・石材の特徴などから1、2～17、18の3類型に分類される。第55図1は、平面形態は闌が表現されず、茎に相当する部分が台形の突出部として表現される。断面形態は菱形に近い六角形を呈し、両面に鎬を持つ。前述の南箱式石棺出土資料（第38図8～21）と同様の形態的特徴を持つ。全長 5.95 cm、幅 2.6 cm、厚み 0.8 cm で、穿孔は片面穿孔である。石材はわずかに緑色を帯びた青色を呈している。表面に白色物質が付着している。

2～17は、平面形態は闌が表現されず、茎に相当する部分が直線的なもの（2・6など）や、半円形に近い突出部として表現されるもの（4・5など）がある。断面形態は、三角形に近い五角形を呈し片面に鎬を持つ。全長 $2.9 \sim 4.2$ cm、幅 $1.6 \sim 2.4$ cm、厚み $0.4 \sim 0.8$ cm である。穿孔は全て片面穿孔である。鎬の表現されない面を下にし、鎬のある表面から穿孔が行われる。3・17は、穿孔位置が左側に大きく片寄っており、中央部は欠損している。穿孔途中で破損したため、位置をずらして穿孔し直したものと思われる。石材はいずれもわずかに緑色を帯びた青色を呈しており、同一の石材と思われる。2～17の全てに白色の付着物が観察される。

18は、平面形態は闌が表現されず、茎に相当する部分が台形の突出部として表現される。断面形態は扁平に近く、片面に見られる鎬も非常に弱い作りである。全長 3.8 cm、幅 2.0 cm、厚み 0.4 cm である。穿孔は両面穿孔と思われる。石材は青白色を呈している。また白色付着物も認められない。

有孔円板は9点ある。内訳は単孔が4点、双孔が5点である（第56図）。単孔円板は全長 $1.9 \sim 2.7$ cm、幅 $1.9 \sim 2.5$ cm、厚み 0.3 cm である。双孔円板は全長 $2.1 \sim 2.6$ cm、幅 $2.0 \sim 2.6$ cm、厚み $0.3 \sim 0.5$ cm を測る。穿孔は全て片面穿孔である。双孔の円板のうち、23のみ異なった面から穿孔が行われているが、それ以外は同一の面から行われている。色調はいずれも青灰色～青白色を呈している。

単孔円板と双孔円板のいずれにも、白色物質が付着している。また、鉄分が付着しているものも見られる。

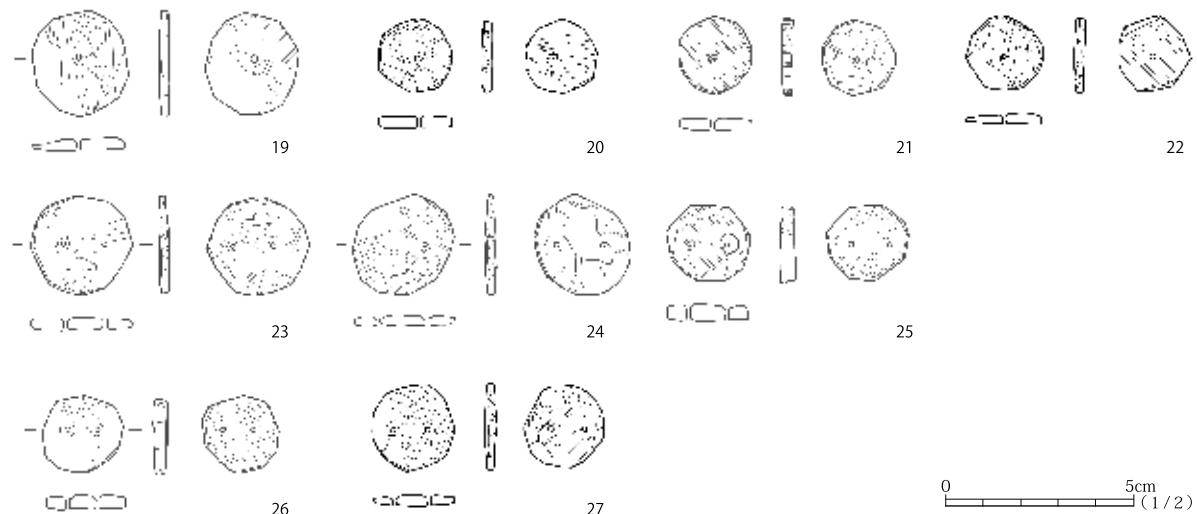
6. 眞玉・ガラス小玉（第57～62図、図版28）

北箱式石棺西側区画からは、総数783点の眞玉が出土した（第57～61図）。眞玉の内訳はA1類が588点、A2類が94点、B類が101点となる。直径は $3.0 \sim 4.0$ mm、厚さは $2.0 \sim 3.5$ mm を測る。

ガラス小玉は、北箱式石棺西側区画からは3点出土している（第62図）。全て淡青色系である。平面形は円形に近いものと橢円形のものがある。また断面形は方形を呈するものと中央部が膨らむものがある。直径 $4.0 \sim 5.0$ mm、厚さ $4.0 \sim 4.5$ mm を測る。出土したガラス小玉のうち気泡列が確認されるものは、全て主軸方向に平行していることが分かる。これはガラスの塊を加熱し管状に伸ばした際、主軸方向に気泡の列が伸び、切断後再加熱し成形する際に気泡の筋が気泡の列に変化したものである。このことから管切り技法と考えられる。



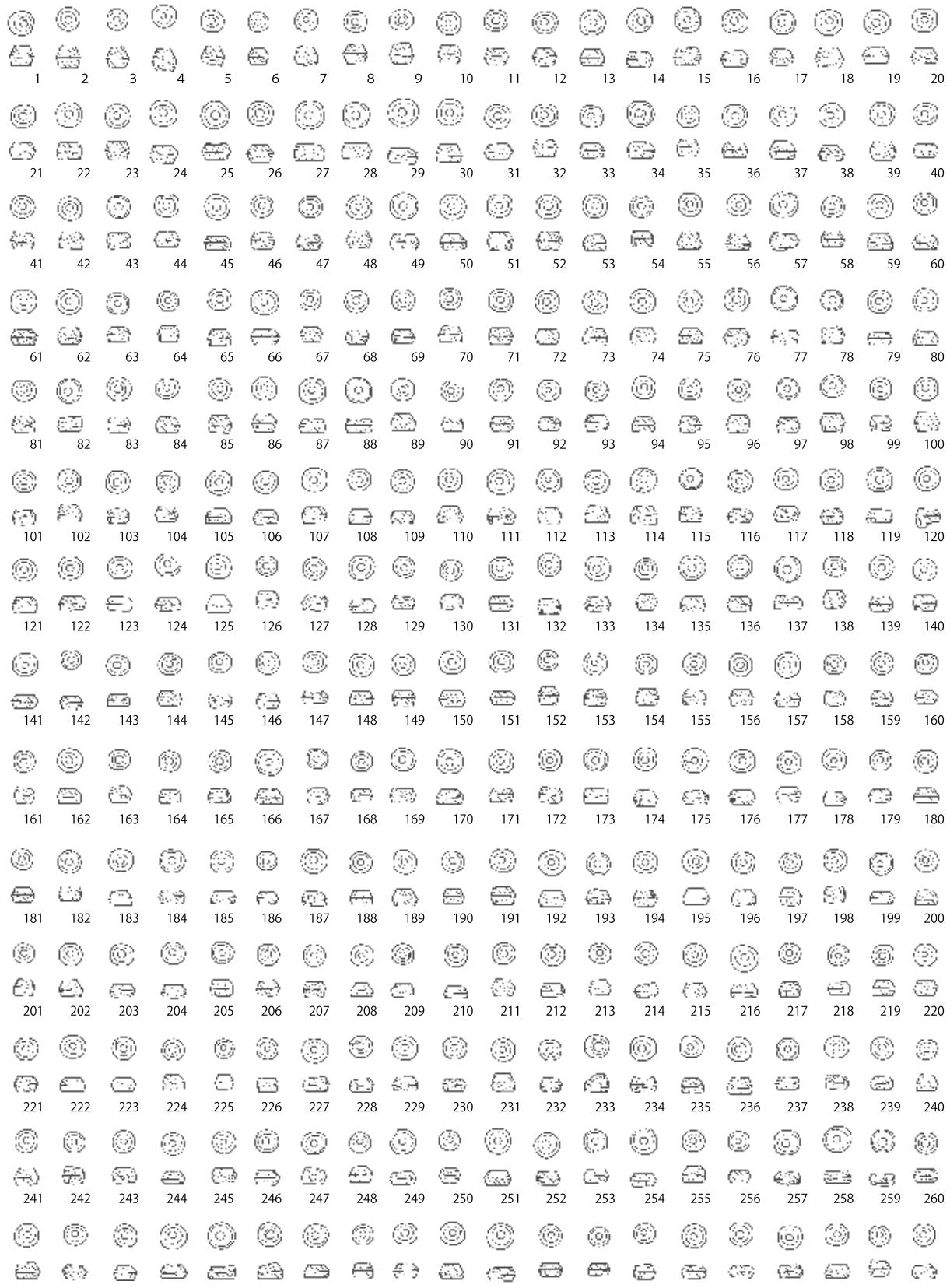
第55図 27号墳北箱式石棺西側区画出土石製模造品(1)



第56図 27号墳北箱式石棺西側区画出土石製模造品(2)

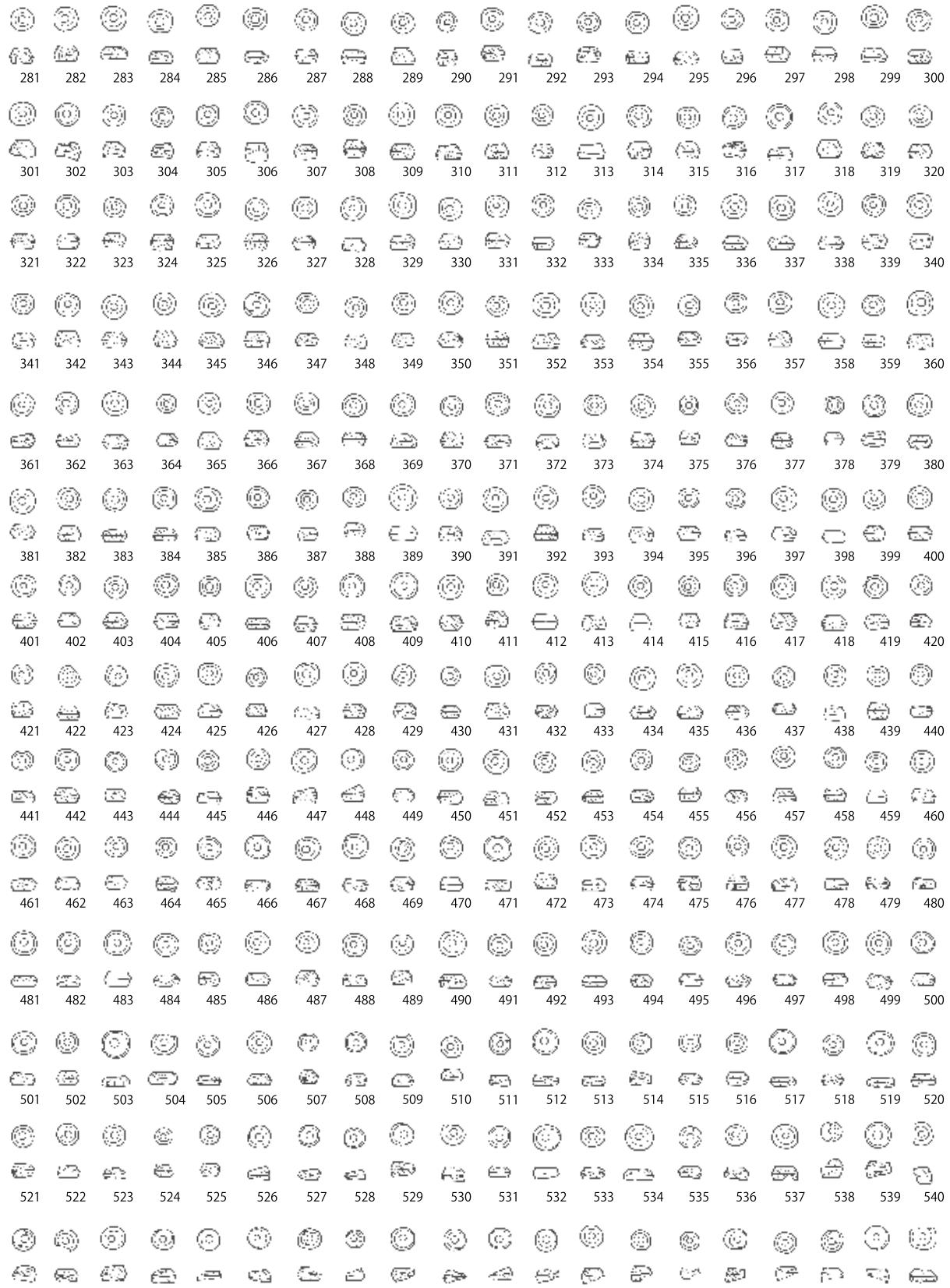


郡山市制施行100周年記念 令和6年度企画展「正直古墳群の全て」
(2024年7月6日～8月25日 大安場史跡公園)



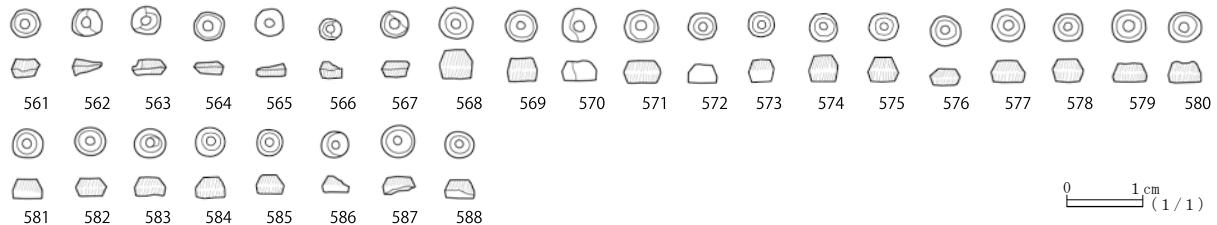
第57図 27号墳北箱式石棺西側区画出土臼玉A 1類 (1)

0 1cm
(1/1)

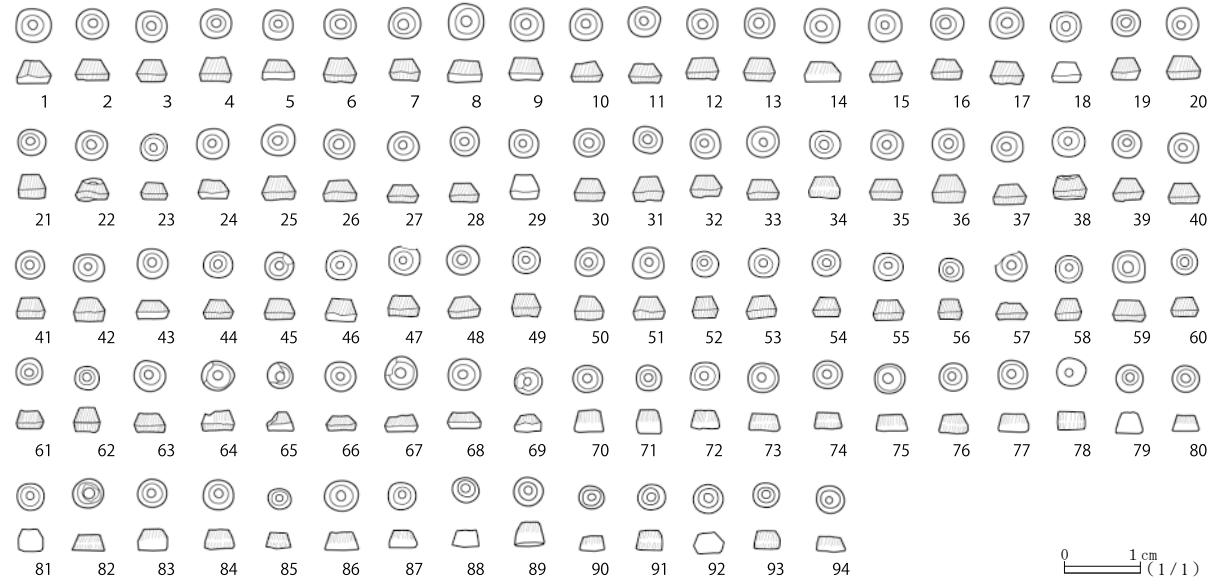


0 1 cm (1/1)

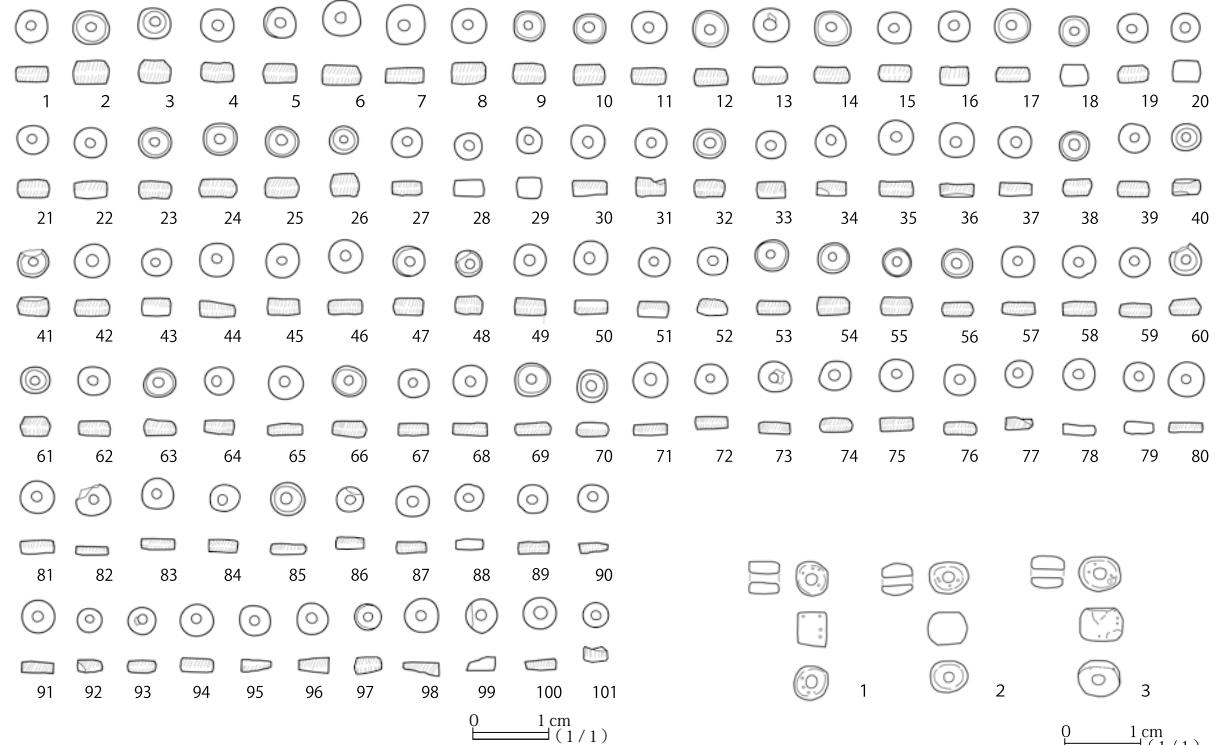
第58図 27号墳北箱式石棺西側区画出土臼玉 A 1類(2)



第59図 27号墳北箱式石棺西側区画出土臼玉 A 1類(3)



第60図 27号墳北箱式石棺西側区画出土臼玉 A 2類



第61図 27号墳北箱式石棺西側区画出土臼玉 B類

第62図 27号墳北箱式石棺
西側区画出土ガラス小玉

(7) 周溝と墳丘外埋葬施設

1. 第8～12 トレンチ (第63・64図、図版29・30)

1970（昭和45）年の調査では、周溝を確認後、断面の状況を確認するために第2～7の6か所のトレンチが設定され、掘り込み調査が行われた。2023（令和5）年の調査では周溝に第8～12の5本のトレンチを設定し、確認した周溝の掘り込みを行う。

前述したように、第2～7トレンチは周溝上端の幅が狭く、第8～12トレンチは幅が広い。こうした状況が生じた背景には、堆積土の認識が関係していると思われる。つまり1970（昭和45）年のトレンチ調査の際は、最も外側に堆積する黄褐色土を地山と認識し、掘り足りなかつた可能性が高いのである。

削平が顕著な北側部分では周溝の残存状況も良くない。そのため、第8トレンチでは周溝外側の立ち上がりが不明瞭である。また9号トレンチでは、周溝が確認されたのはトレンチ北側部分のみである。これは周溝が浅かったか、あるいは全体が削平を受けたためと考えられる。

周溝の幅は、第10トレンチで上端295cm・下端250cm、第11トレンチで上端410cm・下端90cm、第12トレンチでは上端300cm・下端210cmとなる。

第11トレンチの周溝では、黒色を基調とした堆積土の覆土中にFP層が形成されていることを確認した。他のトレンチの周溝では黒色を基調とした堆積土にFPとみられる白色粒子が含まれるもの、純層に近い状態での堆積はない。いずれのトレンチも、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

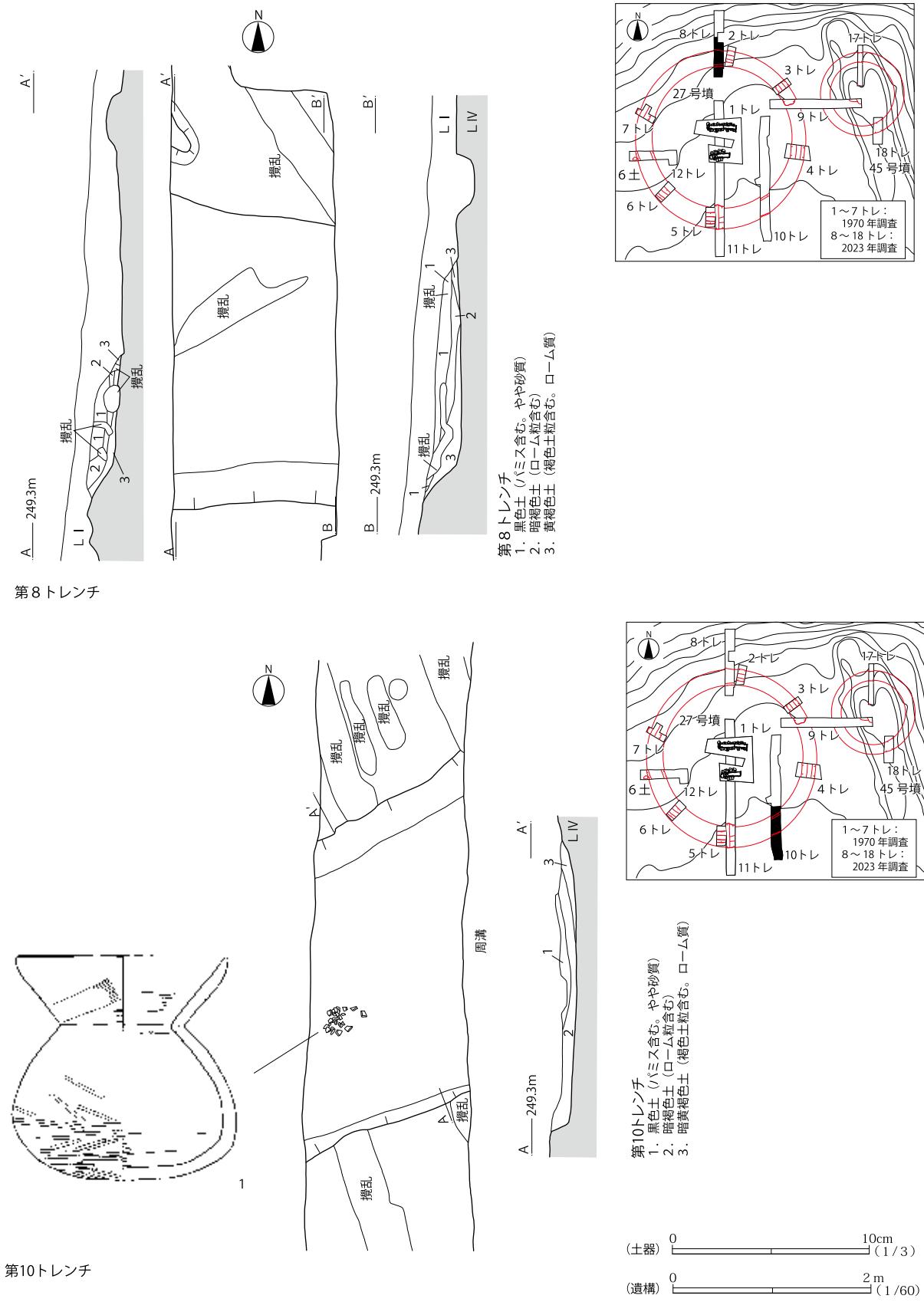
第11トレンチの周溝は他の部分と比べて深く掘削されている。墳丘の南側を意識し、特に深く掘削した可能性もある。一方、各トレンチの底面の標高を見ると、北側第8トレンチが248.2m、西側第11トレンチが248.2mとなり、第11トレンチの248.2mと同じ高さであることが分かる。そのため、削平を受けた部分が見かけのうえで浅くなっている可能性が高い。逆に、第10トレンチのみ周溝底面の標高が248.9mと周囲に比べ高いことから、周溝の南東側では周溝が深い状況も読み取れる。

2. 周溝出土遺物 (第63・64図、図版30・32)

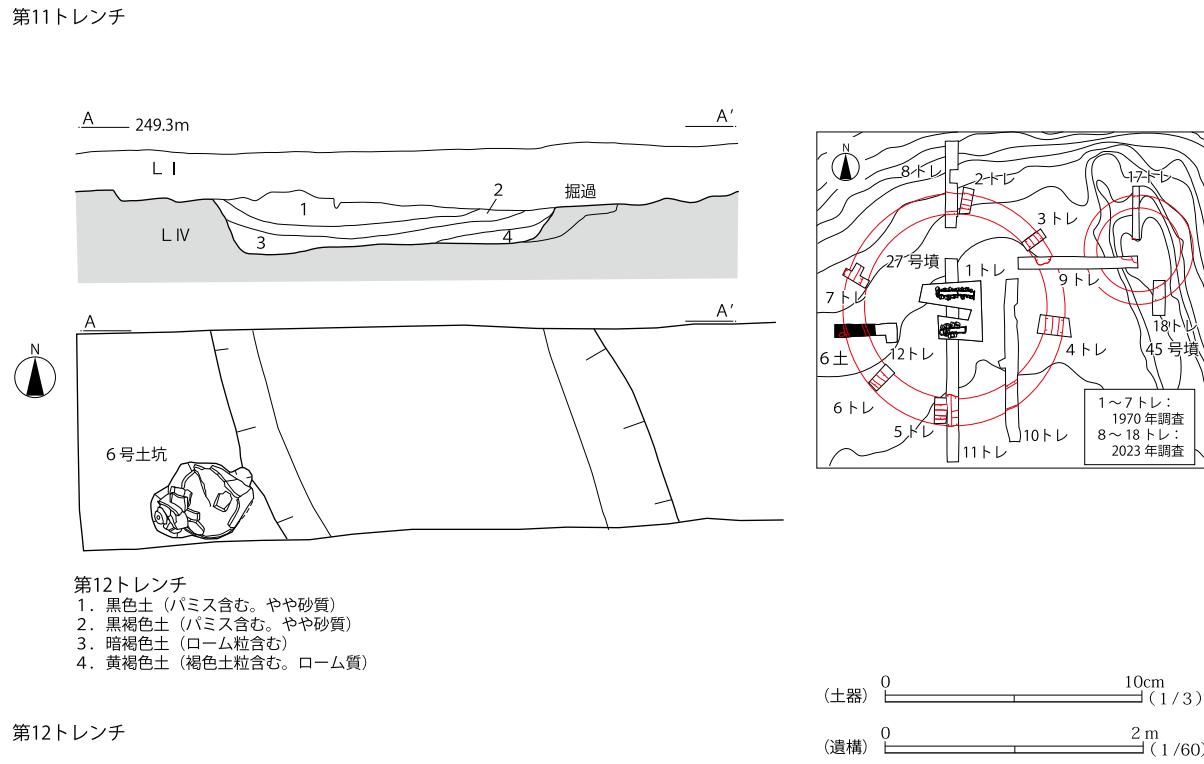
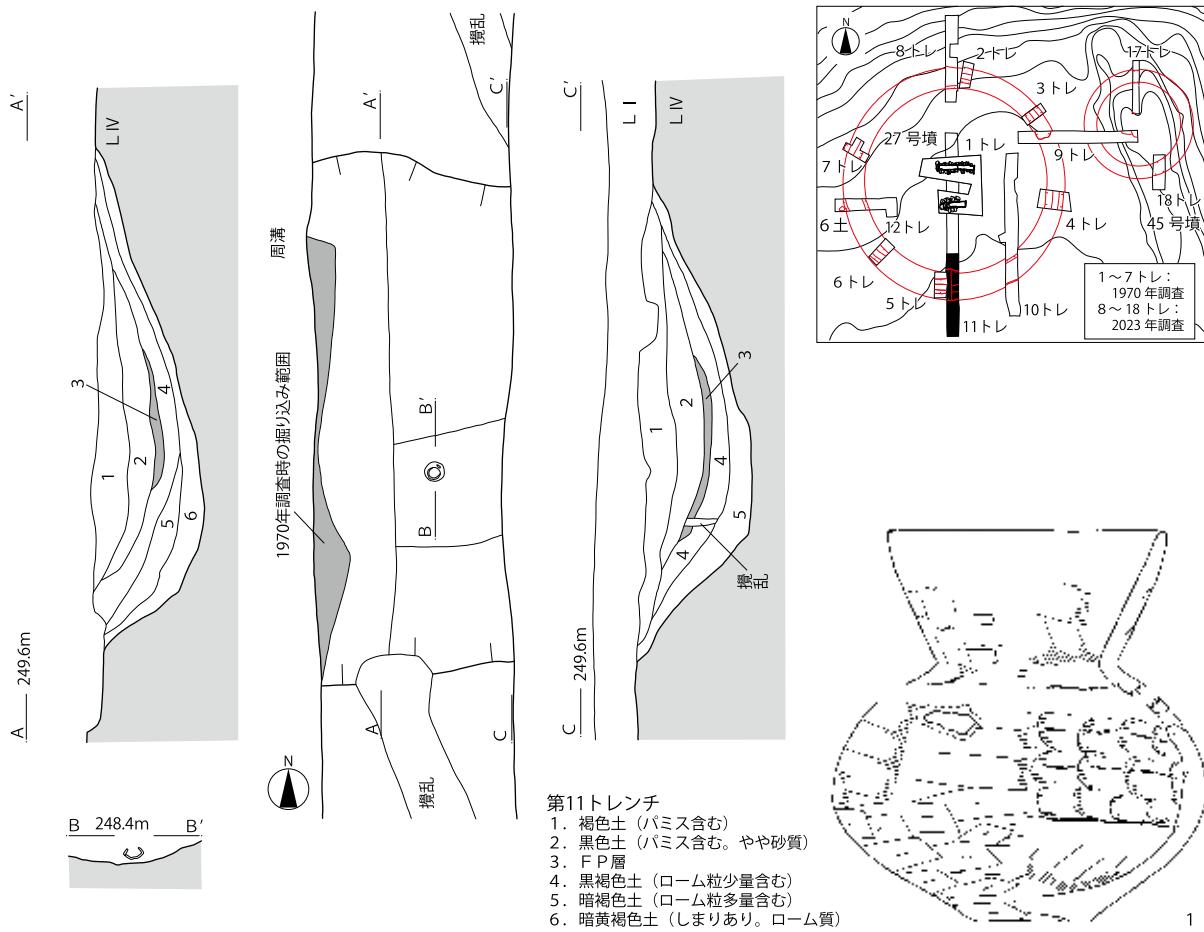
27号墳の周溝からは、土師器壺とともに高壺、弥生土器の破片が出土した。弥生土器と高壺脚部の破片はいずれも周溝堆積土からの出土である。第63図1の壺は、第10トレンチの周溝底面近くの層位から、ばらばらな破片の状態で出土した。意図的に破碎された可能性がある。器高11.9cm、口縁部径11.2cm、体部最大径12.3cmである。体部外面下半にはヘラミガキが見られる。第64図1の壺は、第11トレンチの周溝底面近くの層位から、底部～体部が正位の状態で出土した。直近の周溝堆積土から口縁部の破片が出土しており、接合はしなかったものの胎土や色調の類似から同一個体と判断される。底部外面は窪み、そこから外上方に緩やかに立ち上がる。くの字に屈曲する頸部から立ち上がる口縁部は、端部がわずかに内弯する。外面の体部下半にはヘラケズリが、他はナデ調整が観察される。器高15.4cm、口縁部径11.1cm、体部最大径15.0cmである。体部上半の肩部付近に、焼成後の穿孔がある。また体部下半には比較的大きな欠失があり、意図的な行為の可能性がある。

3. 墳丘外埋葬施設・土器棺 (第65～68図、図版31～33)

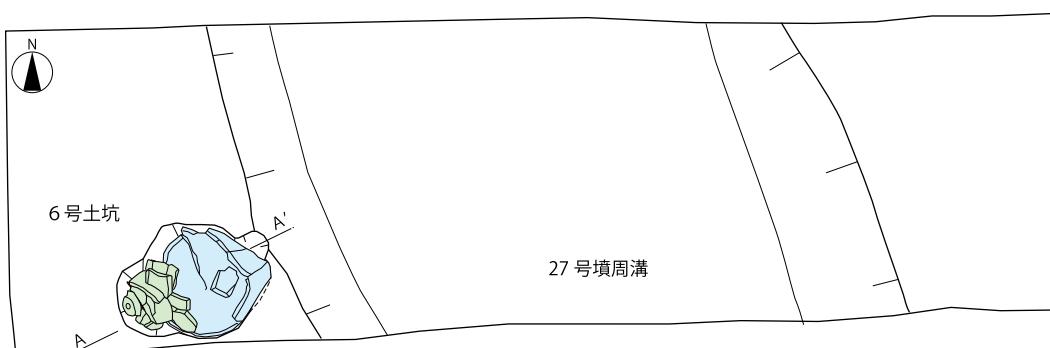
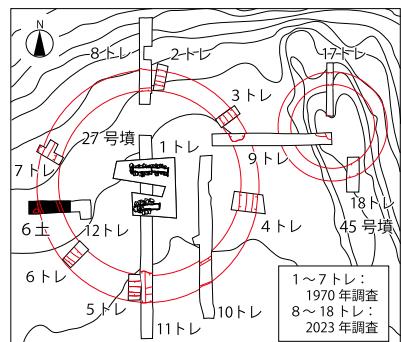
6号土坑は、27号墳の西側周溝外に隣接する土器棺である。土器棺として利用される壺の口縁部中央と底部中央を結んだ線の延長線上に、概ね墳丘の中心が位置することから、墳丘の中央を意識し、棺の長軸線を設定していることが分かる。壺の底部を墳丘に向けて横倒しにして埋設し、別個体の甕の胴上半部の破片を頸部



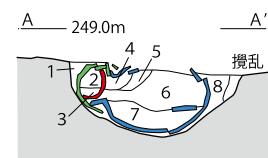
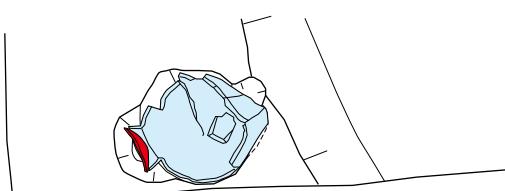
第63図 27号墳周溝第8・10トレンチ平面図・断面図



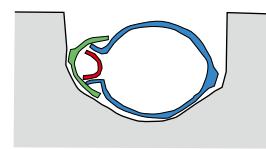
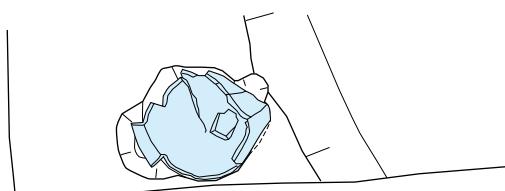
第64図 27号墳周溝第11・12トレンチ平面図・断面図



12トレンチ

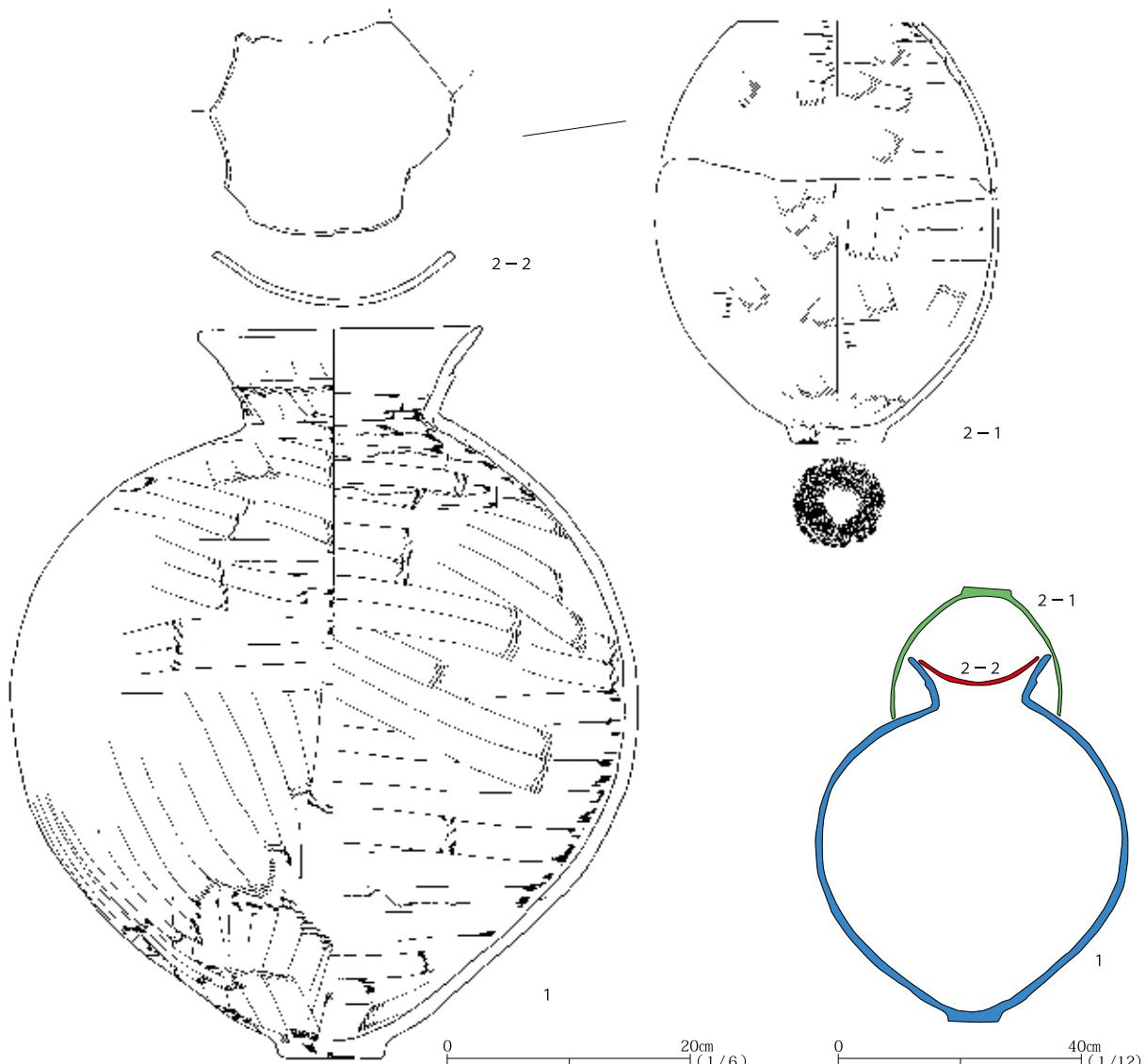


- 6号土坑
1. 黄褐色土 (ローム質)
 2. 黒褐色土 (ロームブック含む)
 3. 黄褐色土 (ローム質)
 4. 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
 5. 暗褐色土 (ローム粒含む)
 6. 暗褐色土 (木炭粒微量含む)
 7. 暗黄褐色土 (ローム粒多量含む)
 8. 暗黄褐色土 (ロームブロック含む。しまりあり)

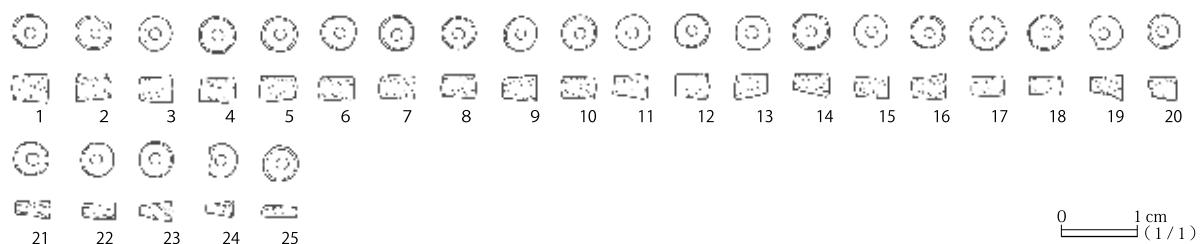


0 2m (1/40)

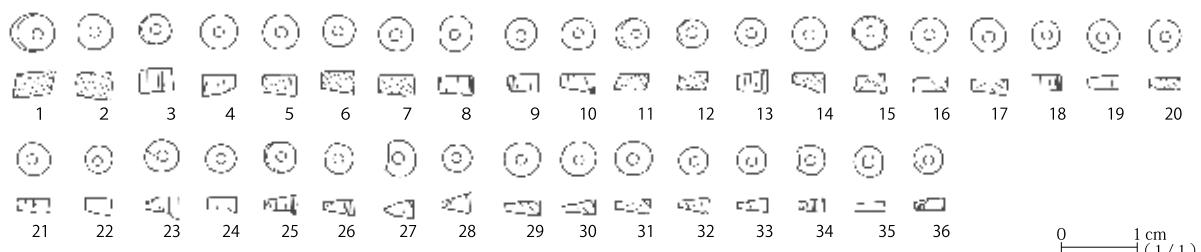
第65図 6号土坑平面図・断面図



第66図 6号土坑出土土器



第67図 6号土坑出土白玉B類



第68図 6号土坑出土白玉C類

内に内蓋として入れ、これと同一個体の胴下半部を鉢状の形状に加工して、外蓋として口縁部と頸部を覆うように被せている。棺である壺の底部周辺の掘り方は認識しやすかったが、その他の部分は掘り方となる隙間はごく僅かである。棺内外の堆積土から滑石製臼玉 61 点が出土した。

第66図1・2は、土器棺として埋設された状態で出土した。土器棺の身として使用された1の壺は、複合口縁となる。部分的にやや形状が歪み、肩の高さが一定しない。口縁部径 24.3 cm、底部径 9.2 cm、器高 61.3 cm となる。2は、同一個体の壺を、胴部中ほどの輪積部分で上下に切断し、上半を内蓋、下半を外蓋として使用している。上半の内蓋は、一部のみを整形し、その他の部分は取り除いている。内蓋として使用された破片と、隣接する27号墳周溝出土の破片とが接合しており、この切断及び整形は、埋設の直前に本遺構の傍らで行われたことが分かる。下半部は底部径 7.5 cm・残存高 21.2 cm、上半を含めると残存高 34.5 cm となる。

臼玉は、土器棺内外の土壤を洗浄して確認したもので、側面の調整からB類とC類の2つに分けられる。第67図1~25は、断面が算盤玉形を呈する個体はないものの、側面の両端部に擦痕が顕著に認められ、側面の中ほどが膨らみ気味となる。C類の第68図1~36は、擦痕が直線的で、側面もB類に比して直線的である。

(8) 正直26号墳 (第69・70図、図版34)

26号墳は、27号墳の周溝外側から17m離れた南側に位置する。周溝の一部を確認したが、埋葬施設は未確認である。墳丘は完全に削平されている。第14トレンチで確認した周溝の幅は上端で190cm、下端で160cmとなる。周溝の確認状況から判断すれば、直径14m前後の円墳と考えられる。周溝の一部について掘り込み調査を行い、黒色を基調とした堆積土の堆積中にFP層が形成されていることを確認した。周溝の堆積土はレンズ状の堆積であることから、自然堆積と考えられる。

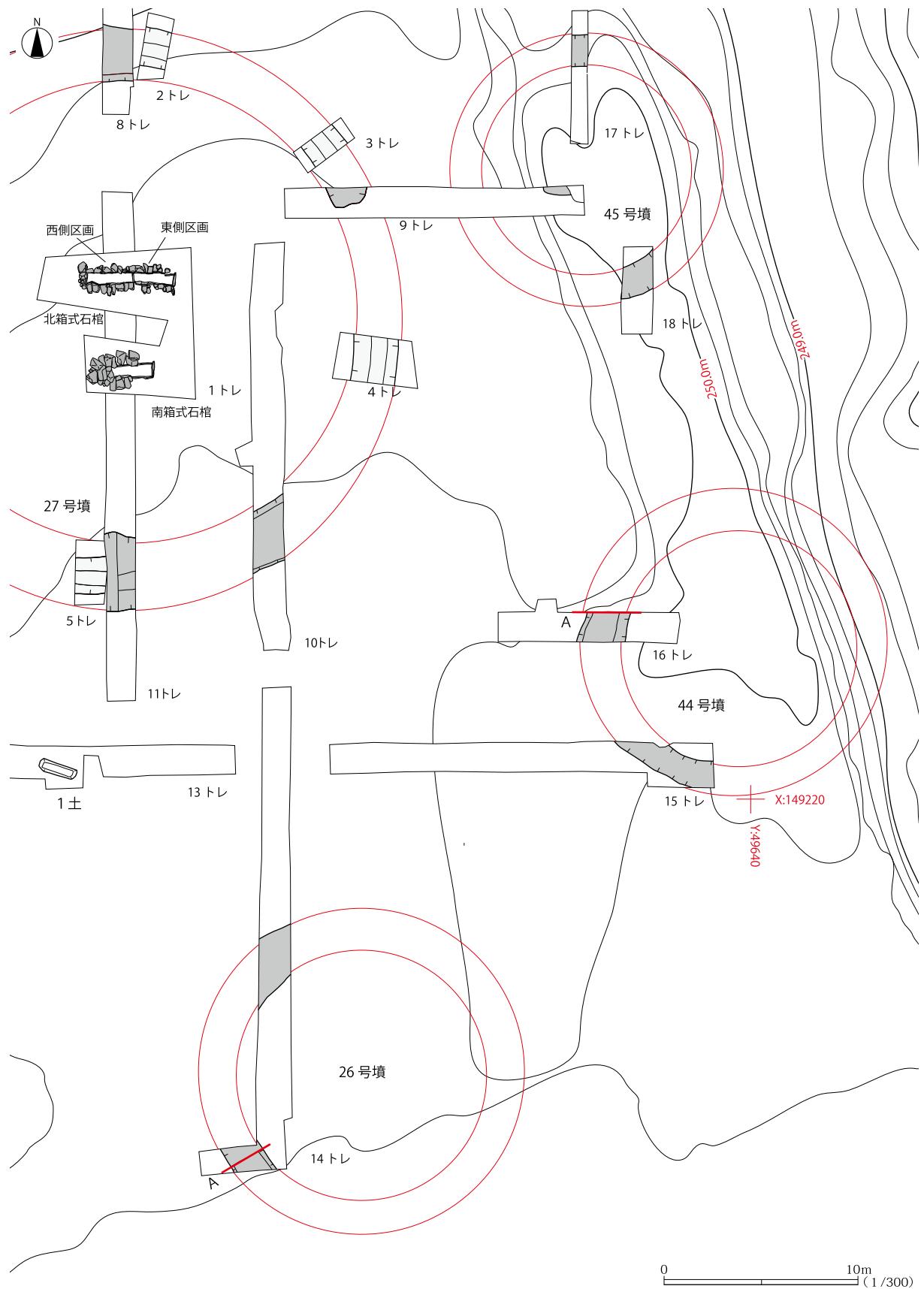
(9) 正直44号墳 (第69・70図、図版35)

44号墳は、27号墳の周溝と15m離れた南東側に位置する。周溝の一部を確認したが、埋葬施設は未確認である。墳丘は完全に削平されている。第16トレンチで確認した周溝の幅は、上端で200cm、下端で140cmである。周溝の確認状況から判断すれば、直径12m前後の円墳と考えられる。周溝の一部について掘り込み調査を実施した。黒色を基調とする1・2にはFPとみられる白色粒子を含むが、純層にはならない。周溝の堆積土はレンズ状の堆積であることから、自然堆積と考えられる。

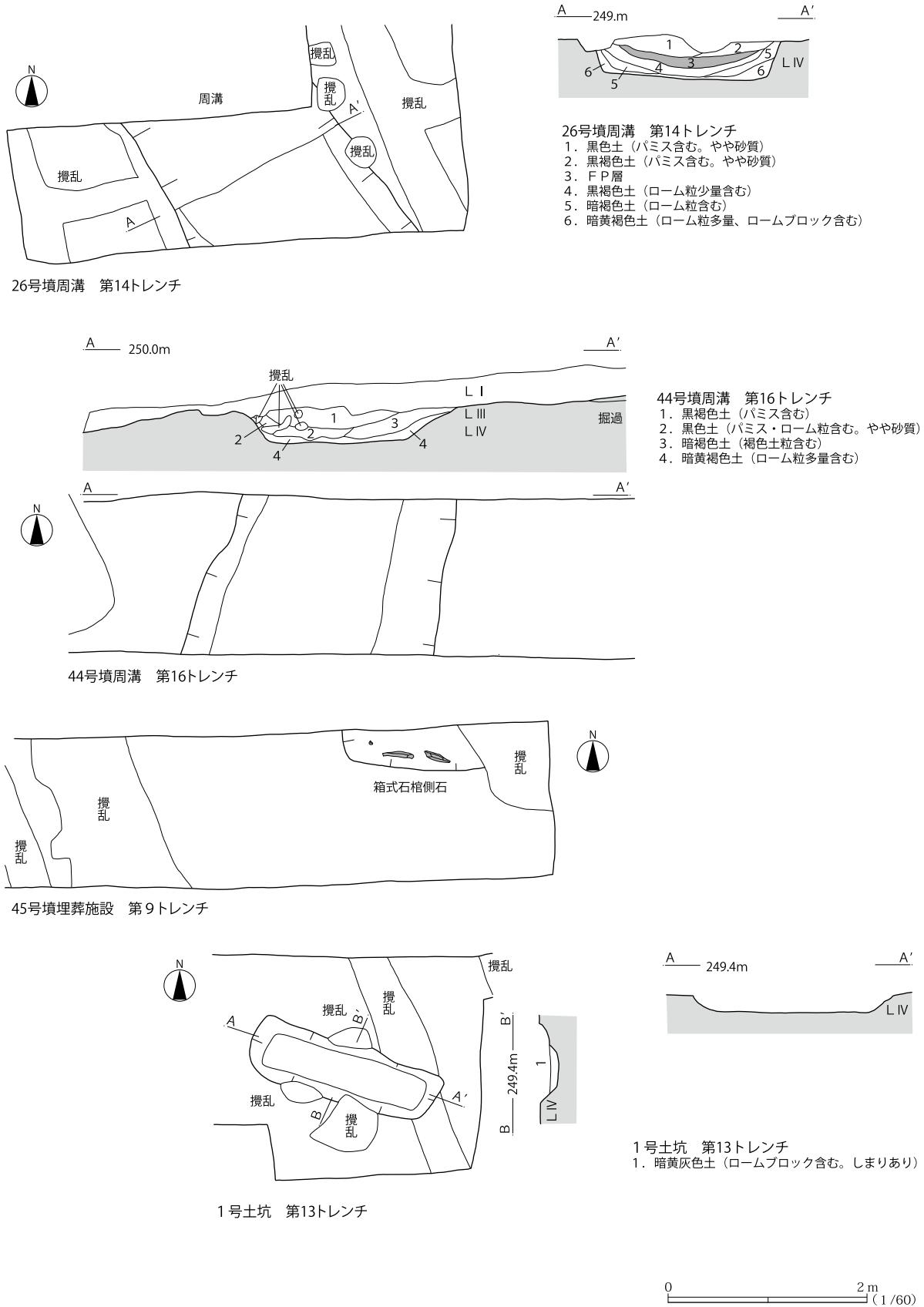
(10) 正直45号墳 (第69・70図、図版35)

45号墳は27号墳の東側に隣接する。推定される周溝からは、古墳の間隔は7m前後となる。周溝の一部と埋葬施設を確認した。墳丘は完全に削平されている。周溝の確認状況から判断すれば、直径11m前後の円墳と考えられる。第17トレンチで北側の周溝を、第18トレンチで南側の周溝を確認したが、周溝の掘り込み調査は行っていない。確認面での周溝の幅は、第17トレンチで240cm、第18トレンチで290cmとなる。

第9トレンチの東端で埋葬施設を確認した。埋葬施設は箱式石棺で、その南側壁と墓坑の一部を確認したが、掘り込み調査は行っていない。埋葬施設の東側が攪乱で大きく失われている。この攪乱は墳丘の中央部にあり、盗掘孔と考えられる。北側壁はトレンチ外である。板状の石材が立った状態で2枚並ぶ以外は、多くの石材が抜き取られている。



第69図 26・44・45号墳・1号土坑全体図



第70図 26・44・45号墳周溝・1号土坑平面図・断面図

(11) 1号土坑（第70図）

1号土坑は、27号墳の周溝の8.7m南側に位置する。第13トレンチで確認した規模は、上端で198×60cm、下端で170×35cmである。平面形状から土坑墓と考えられる。堆積土の多くは攪乱で失われていたが、ロームブロックを含みしまりのある堆積土であることから、人為堆積と判断される。

註

- 1) 滑石製臼玉の点数については注意を要する。調査当時書かれた田中正能氏の原稿や遺物一覧表によると、東側区画が673個、西側区画が767個とある。さらに南箱式石棺で8個出土とある。東側区画の点数は、現在「連」として残る673点と変わらない。しかし、西側区画の点数については、「連」として残るのは783点であり調査時の記録より16点多い。一方、南箱式石棺については、8個出土したと記録が残るもの、現在それに該当する遺物は見られない。そのため、本来南箱式石棺から8個が出土し、それらが北箱式石棺西側区画に混入してしまったということも考えられる。また、筆者が臼玉を調査した段階でも両区画の臼玉の収納は逆になっており、保管や貸し出しの際に混乱が生じていたと思われる。